

# 香川県埋蔵文化財センター年報

平成 25 年度

2014. 9

香川県埋蔵文化財センター

## はじめに

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行なうとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設置されました。

平成25年度は、国道11号大内白鳥バイパス建設、国道438号道路改築、普通寺院更新築整備、県道建設、学校施設改修に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び過年度発掘の整理、報告書刊行をはじめ、出土品の保管・整理、普及啓発事業、讃岐国府跡探索事業などを実施し、これらの調査によって得られた多くの成果等をもとに、展示や、広報誌の刊行、学校での出前授業や考古学体験講座を行い、埋蔵文化財の保護意識の普及・啓発に努めました。

本書は、これらの平成25年度に実施した事業の内容をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化への理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、今後とも当センターの活動に皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年9月

香川県埋蔵文化財センター  
所長 真鍋昌宏

# 目 次

I	組織・施設・決算	
1.	香川県埋蔵文化財センターの組織	1
2.	施設の概要	2
3.	決算の状況	3
II	事業概要	
1.	埋蔵文化財調査事業	
	事業概要	4
	西村遺跡	6
	旧練兵場遺跡	9
	太田原高州遺跡	15
	多肥北原西遺跡	17
	岸の上遺跡	20
	石田高校校庭内遺跡	22
2.	普及啓発事業	
1	展示	26
2	現地説明会・地元説明会	27
3	講師の派遣	27
4	坂出市立府中小学校との連携事業（よろこび学習）	29
5	夏休み子どもミュージアム	29
6	考古学講座	29
7	文化ボランティア活動	30
8	四国新聞への掲載	30
9	資料の貸出・利用	30
10	職場体験学習	30
11	刊行物	30
12	ホームページ	30
13	資料の寄贈	31
3.	讃岐国府跡探索事業	31
III	讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告	
1.	讃岐国府跡の発掘調査（第31次）	36
2.	讃岐国府跡の整理作業	40
3.	新宮古墳の確認調査	40
IV	調査研究	
1.	川北遺跡の古代集落とその変遷	46
2.	（提言）記録保存としての報告書	55

## 挿 図 目 次

第1図 発掘調査遺跡位置図	5	第15図 遺構配置図(1/200)・土層堆積図 (縦1/100、横1/200)	25
西村遺跡		讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告	
第2図 遺跡位置図(1/25,000)	6	第16図 糸里地割と余刺帯	34
第3図 遺構配置図(1/300)	8	第17図 糸里地割と南海道推定ライン (丸亀市飯山町)	35
旧練兵場遺跡		第18図 讃岐国府跡における既往の調査区	37
第4図 遺跡位置図(1/25,000)	9	第19図 遺構平面図	38
第5図 調査区割図(1/2,500)	10	第20図 新宮古墳墳丘測量図	42
第6図 2-2区遺構配置図(1/200)	12	第21図 新宮古墳石室実測図	43
第7図 5区遺構配置図(1/200)	13	川北遺跡の古代集落とその変遷	
太田原高州遺跡		第22図 遺跡の位置と糸里型地割	48
第8図 遺跡位置図(1/25,000)	15	第23図 集落の変遷(Ⅰ期 7世紀後半)	51
第9図 遺構配置図(1/160)	16	第24図 集落の変遷(Ⅱ期 7世紀末~8世紀前 半)	51
多肥北原西遺跡		第25図 集落の変遷(Ⅲ期 8世紀前半~8世紀 中葉)	52
第10図 遺跡位置図(1/25,000)	17	第26図 SD05・SD06・SD08 包含層出土須恵器実 測図	52
第11図 遺構配置図	19	第27図 SB219 平面図	57
岸の上遺跡			
第12図 遺跡位置図(1/25,000)	20		
第13図 遺構配置図(1/200)	21		
石田高校校庭内遺跡			
第14図 遺跡位置図(1/25,000)	22		

## 写 真 目 次

西村遺跡		写真9 2-2区遺構検出状況(北から)	11
写真1 2区北半SR01 完掘状況(南から)	7	写真10 4区道(SD4006)路面検出状況 (東から)	14
写真2 2区南半SR01 中層土器出土状況(北から)	7	写真11 4区SR4001 中層下位 鉄鋌出土状況 (南から)	14
写真3 3区SH01 完掘状況(北西から)	7	写真12 5区SD5008・SD5001 遺物出土状況 (東から)	14
写真4 3区SH01 中央土坑内壺・炭化材出土状況 (北東から)	7	写真13 5区SD5008 軒平瓦出土状況(南から)	14
旧練兵場遺跡		写真14 5区堅穴建物群完掘状況(東から)	14
写真5 1区SH1005と北へ延びる屋外排水溝 (北から)	9	太田原高州遺跡	
写真6 1区SR1003 2層下位土器群(北から)	9	写真15 SD03 遠景(北から)	15
写真7 2区SR2002 2層下位土器出土状況 (南から)	11	写真16 区画墓6(西から)	15
写真8 2区SK2004・SK2005 遺物出土状況 (東から)	11	写真17 調査区全景(西から)	16
		写真18 調査区全景(東から)	16

多肥北原西道跡		讃岐国府探索事業	
写真 19	5区調査区全景(西から)・・・・・・・・・・	18	写真 31 調査地の遠景・・・・・・・・・・
写真 20	4区SD09中層須恵器・礫出土状況 (北西から)・・・・・・・・・・	18	写真 32 大溝1(南東から)・・・・・・・・・・
写真 21	4区SD09断面(西から)・・・・・・・・・・	18	写真 33 建物2全景(西から)・・・・・・・・・・
岸の上道跡		写真 34	建物1 4003号柱穴断面(北から)・・
写真 22	調査区北半部(南から)・・・・・・・・・・	20	写真 35 建物1・5・7全景(東から)・・
写真 23	竪穴建物のカマドから出土した甕(南から) ・・・・・・・・・・	20	写真 36 建物4上面の瓦溜り(東から)・・
石田高校校庭内道跡		写真 37	建物4全景(東から)・・・・・・・・・・
写真 24	SH04全景(北から)・・・・・・・・・・	22	写真 38 5次調査(昭和54年度)の総柱建物・・
写真 25	SH09全景(北から)・・・・・・・・・・	22	写真 39 6次調査(昭和55年度)の築地基壇・・
写真 26	SH01全景(南から)・・・・・・・・・・	23	写真 40 石室全景(西から)・・・・・・・・・・
写真 27	SD07全景(東から)・・・・・・・・・・	23	写真 41 玄室全景(西から)・・・・・・・・・・
写真 28	SB04全景(東から)・・・・・・・・・・	23	写真 42 玄室全景(東から)・・・・・・・・・・
写真 29	SB02全景(南から)・・・・・・・・・・	24	
写真 30	SD01掘削状況(南から)・・・・・・・・・・	24	

## 目 次

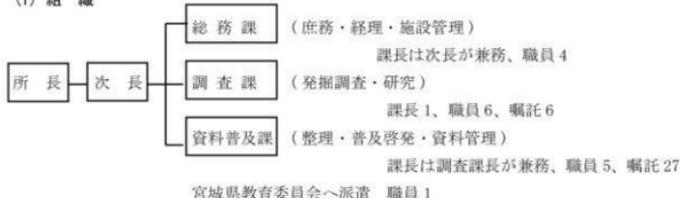
第1表	職員一覧・・・・・・・・・・	1～2	第16表	坂出市立府中小学校との連携事業一覧 ・・・・・・・・・・	29
第2表	発掘調査決算・・・・・・・・・・	3	第17表	夏休み子どもミュージアム実施事業一覧 ・・・・・・・・・・	29
第3表	整理・報告決算・・・・・・・・・・	3	第18表	考古学講座一覧・・・・・・・・・・	29
第4表	管理運営費等決算・・・・・・・・・・	3	第19表	資料貸出・利用一覧・・・・・・・・・・	30
第5表	発掘調査道跡一覧・・・・・・・・・・	4	第20表	職場体験学習一覧・・・・・・・・・・	30
第6表	道跡の概要一覧・・・・・・・・・・	4	第21表	掘立柱建物・櫓列一覧表・・・・・・・・	48
第7表	整理・報告道跡一覧・・・・・・・・・・	5	第22表	掘立柱建物・櫓列の所属時期と時期比定の 根拠・・・・・・・・・・	50
第8表	刊行報告書一覧・・・・・・・・・・	5	第23表	溝状遺構の所属時期と時期比定の根拠 ・・・・・・・・・・	50
第9表	展示一覧・・・・・・・・・・	26	第24表	遺構の年代・・・・・・・・・・	56
第10表	入館者数一覧・・・・・・・・・・	26	第25表	甕の各型式の基準資料内での共伴状況 ・・・・・・・・・・	60
第11表	センター外展示一覧・・・・・・・・・・	26	第26表	一括土器から見た編年観・・・・・・・・	61
第12表	現地説明会・地元説明会一覧・・・・・・・・	27			
第13表	体験講座への講師派遣一覧・・・・・・・・	27			
第14表	学校への講師派遣一覧・・・・・・・・・・	28			
第15表	講演等への講師派遣一覧・・・・・・・・・・	28			

※ 地図は国土地理院地形図を使用しました。

## I 組織・施設・決算

### 1 香川県埋蔵文化財センターの組織

#### (1) 組織



#### (2) 職員

所 属	職 名	氏 名
所 長		真鍋 昌宏
次 長		前田 和也
総 務 課	課 長(兼務)	前田 和也
	主 任	宮武 ふみ代
	主 任	俣野 英二
	主 任	高木 秀哉
	主 任	中川 美江
調 査 課	課 長	森 格也
	主任文化財専門員	森下 英治
	文化財専門員	信里 芳紀
	文化財専門員	小野 秀幸
	文化財専門員	長井 博志
	技 師	真鍋 貴匡
	主 任	西谷 敬司
	嘱 託	藤井 菜穂子
	嘱 託	今井 由佳
	嘱 託	井上 加奈子
	嘱 託	名倉 美保
	嘱 託	甲斐 美智子
	嘱 託	脇 恵
資 料 普 及 課	課 長(兼務)	森 格也
	主任文化財専門員	西村 尋文
	主任文化財専門員	木下 晴一

資料普及課	文化財専門員	森下 友子
	文化財専門員	山元 素子
	文化財専門員	乗松 真也
	嘱託	徳永 貴美
	嘱託	伊藤 真紀
	嘱託	合田 安里
	嘱託	北濱 敦子
	嘱託	岡崎 江伊子
	嘱託	中野 優美
	嘱託	佐々木 博子
	嘱託	加藤 恵子
	嘱託	香西 栄理
	嘱託	西山 佳代子
	嘱託	市川 孝子
	嘱託	山地 眞理子
	嘱託	猪木原 美恵子
	嘱託	葛西 薫
	嘱託	高橋 千恵
	嘱託	牧野 香織
	嘱託	森 后代
	嘱託	土居 乃里子
	嘱託	大林 眞沙代
	嘱託	原 節子
嘱託	竹村 恵子	
嘱託	川井 佐織	
嘱託	大山 和子	
嘱託	合田 和子	
嘱託	西本 智子	
嘱託	田中 沙千子	
嘱託	森園 愛子	
宮城県派遣	文化財専門員	蔵本 晋司

第1表 職員一覧

## 2 施設の概要

### (1) 所在地

香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

(2) 敷地面積	11,049.23 ㎡	
(3) 建物構造・延床面積		
①本館	鉄筋コンクリート造・2階建 (一部鉄骨造・平屋建)	1,362.23 ㎡
②分館	鉄骨造・2階建	337.35 ㎡
③第1収蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32 ㎡
④第2収蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33 ㎡
⑤車庫	鉄骨造・平屋建	29.97 ㎡
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00 ㎡

### 3 決算の状況

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	西村遺跡	15,830
普通寺病院	旧練兵場遺跡	26,782
道路課	太田原高州遺跡	17,692
	多肥北原西遺跡	
	岸の上遺跡	10,127
高校教育課	石田高校校庭内遺跡	10,128
合 計		80,559

※職員人件費は除く

第2表 発掘調査決算(単位:千円)

原因者	遺跡名	決算
普通寺病院	旧練兵場遺跡	39,656
道路課	元塚遺跡	5,377
	川津六反地遺跡ほか	7,409
	本村中遺跡	8,837
	大下遺跡ほか	14,989
河川砂防課	川津六反地遺跡	1,995
農業経営課	西末則遺跡	19,734
合 計		97,997

※職員人件費は除く

第3表 整理・報告決算(単位:千円)

管理運営費等	管理運営費	4,135
	職員給与費	142,737
	讃岐国府跡探索事業	607
合 計		147,479

第4表 管理運営費等決算(単位:千円)

## Ⅱ 事業概要

### 1 埋蔵文化財調査事業

#### 事業概要

調査課は、2班体制で国道バイパス建設、善通寺病院更新築整備、県道整備、高校施設耐震化事業に伴う6遺跡の発掘調査を行うとともに、讃岐国府跡探索事業に係る発掘調査を1班が担当した。資料普及課は、5班体制で善通寺病院統合、県道整備、河川改修、県農業試験場移転事業に伴う8遺跡の整理及び報告書の作成を行った。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間
国土交通省	国道11号大内白鳥バイパス建設	西村遺跡	東かがわ市西村	2,083	6月～9月
善通寺病院	善通寺病院更新築整備	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	1,009	6月～3月
道路課	太田上町志度線	太田原高州遺跡	高松市太田上町	324	4月～5月
		多肥北原西遺跡	高松市多肥上町	1,233	1月～3月
	国道438号	岸の上遺跡	丸亀市飯山町	340	4月～5月
高校教育課	耐震化スピードアップ事業	石田高校校庭内遺跡	さぬき市寒川町	407	10月～1月
合 計				5,396	

第5表 発掘調査遺跡一覧

遺跡名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
西村遺跡	弥生時代～古墳時代の集落跡と水路跡。	古墳時代の竪穴建物。 弥生時代～古墳時代の溝状遺構。 弥生土器、土師器、須恵器。
旧練兵場遺跡	弥生時代～中世の集落跡、河川跡、道路遺構。	弥生時代の竪穴建物と掘立柱建物。 古墳時代の竪穴建物。 中世の道路遺構。 弥生土器、土師器、須恵器、石器、銅鋳、勾玉、管玉、ガラス玉、白玉、鉄錠。
太田原高州遺跡	弥生時代～古墳時代の集落跡。 弥生時代の墳墓。	弥生時代の掘立柱建物。 古墳時代の竪穴建物。 弥生時代の区画墓。 弥生土器、土師器。
多肥北原西遺跡	古代の道路遺構。	古代の溝状遺構、道路遺構 土師器、須恵器。
岸の上遺跡	古墳時代の集落跡。	古墳時代の掘立柱建物。 古代の溝状遺構。 土師器、須恵器。
石田高校校庭内遺跡	弥生時代～中世の集落跡。	弥生時代の竪穴建物。 古代の掘立柱建物。 弥生土器、土師器、須恵器、瓦。

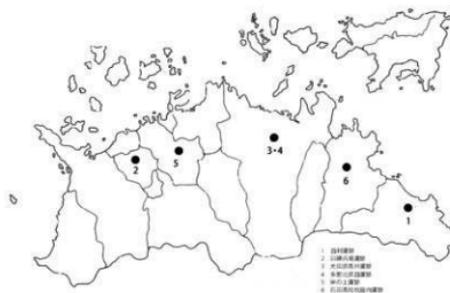
第6表 遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
善通寺病院	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	4月～3月
道路課	元塚遺跡	高松市檀紙町	8月～10月
	川津六反地遺跡	坂出市川津町	4月～6月
	本村中遺跡	三豊市詫間町	11月～3月
	大下遺跡	高松市三名町	4月～7月
	多肥北原西遺跡	高松市多肥上町	8月～11月
	太田原高州遺跡	高松市太田上町	12月～3月
	上東原遺跡	高松市鹿角町	平成24年度
河川砂防課	川津六反地遺跡	坂出市川津町	4月～3月
農業経営課	西末則遺跡	綾歌郡綾川町	7月
生涯学習・文化財課	高松市茶臼山古墳	高松市東山崎町他	6月～3月

第7表 整理・報告遺跡一覧

書名
独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 旧練兵場遺跡Ⅳ
県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 上東原遺跡・大下遺跡
国道438号道路改良工事・県道富熊宇多津線道路改良工事・城山川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津六反地遺跡・川津昭和遺跡
香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 西末則遺跡Ⅳ
讃岐国府跡発掘調査概報 平成23・24年度香川県内遺跡発掘調査
讃岐国府跡探索事業調査報告 平成25年度 新宮古墳・醍醐3号墳の確認調査

第8表 刊行報告書一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図

にしむら  
西村遺跡

西村遺跡は東かがわ市西村に所在する遺跡であり、楠谷川を挟んで東西に広がる。今年度は楠谷川の東側部分を発掘調査し、弥生時代～古墳時代の集落跡、近世の集落跡などを検出した。遺跡の立地を俯瞰すると、南北方向に延びる2つの丘陵に挟まれた大きな谷地形の内部に所在する。この内部では先述の楠谷川が北流する。

基本層序は 1. 造成土、2. 耕作土、3. 床土、4. 包含層、5. 遺構面ベース土である。5の遺構面ベース土は暗黄褐色系砂質シルトあるいは灰白色系粗砂である。両者の層序関係は暗黄褐色系砂質シルトの下位に灰白色系粗砂が分厚く堆積する。このため遺構が形成される以前には、やや不安定な地理的環境にあったと考えられる。



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)

主要な遺構としては、弥生時代後期～古墳時代中期前半に属する大型の溝状遺構1条、古墳時代初期ごろの竪穴建物1棟などがある。

2区SR01は弥生時代後期～古墳時代中期にかけて存続した大型の溝状遺構である。埋没土は大きく3層(上層・中層・下層)に区分できる。上層は暗黄褐色系シルト質粘土である。出土遺物には多量の古墳時代前期末～中期の土師器がある。組成的には土師器高杯と小型丸底壺が目立つ。中層は上位に暗褐色系シルト質粘土が堆積し、部分的に黄褐色系砂が切り込む。下位には灰色系粘土質シルト(ややグライ化)が堆積する。出土遺物には上層とほぼ同時期の土師器があるが量的には乏しい。下層は暗灰色系シルト(灰白色細砂をラミナ状に含む)と黄褐色系砂の互層である。出土遺物には弥生時代後期後半の壺・甕などがある。量的には乏しい。

以上の土層堆積状況より、大溝は大まかに言えば、下層堆積時には旺盛な水流があったが、中層堆積時にはそれがやや滞り、上層堆積時には水流が途絶え、緩やかに埋没したと考えられる。こうした状況と溝の規模から基幹水路として機能したと見られる。

なお、本遺構は立地的には大きな谷地形内に位置し、近隣には現在も河川が存在するため、旧河道の可能性もある。だが、断面形は逆台形状に整い、底場もほぼ平坦である。このため人為的に掘削されたものと考えられる。

3区SH01は1辺約5mの隅丸方形の竪穴建物である。埋没した旧河道(3区SX01)を切りこんで構築される。住居の埋土からは多量の炭化材が出土した。長さ0.1～0.3m程度の小片が多いが、中には住居の主軸方向と向きを揃え、約1mを測るものもある。これについては住居の梁材の可能性もある。なお、炭化材の出土量から考えると、焼失家屋の可能性もあるが、焼土は少量しか出土しておらず断定しがたい。

炭化材を取り除くと、住居の床面構造が判明した。ほぼ中央に中央土坑を配置し、主柱穴は4基持つ。

また、住居内の周縁部に壁溝を設ける。このうち、中央土坑と壁溝は貼床上面から掘り込むことを土層断面の観察により確認した。中央土坑は2基検出した。これらは貼床を方形に浅く掘りくぼめた後で、さらに掘り下げて構築している。西側の浅い土坑では炭混じりの焼土を、東側の深い土坑では厚さ約0.1mの炭層を確認した。

出土土器は小型の土師器壺・甕・鉢などが少量出土した。このうち、鉢は口縁部を上に向け、東側の深い中央土坑の炭層直上に接地して出土した。原位置を保っていると考えられる。出土土器より3区SH01の時期は古墳時代中期初めごろと考えられる。

今回の発掘調査における主たる成果は、弥生時代後期～古墳時代中期前半にかけて水路として機能した大型の溝状遺構（2区SR01）と古墳時代中期初めごろに属する竪穴建物（3区SH01）を検出したことである。旧大内町域の既往の調査では、1弥生時代以来、山間部と平野部の境界付近の安定した立地に集落が営まれる例が多い。2古墳時代中期の集落は弥生時代後期～古墳時代前期までのそれと比べて減少する、の2点が指摘されている。

だが、今回の西村遺跡の調査により、立地的には大きな谷地形の内部で遺構面ベース土下位には分厚く砂層が堆積するというやや不安定な環境に所在する遺跡においても、古墳時代中期に集落の形成と灌漑用水路の利用が行なわれ、耕地開発が進められている状況がうかがえた。

古墳時代後期に旧大内町域では集落や竪穴建物の検出数が再び増加し、古墳は中期以降多く構築される。後続する時期のこうした状況には、弥生時代以来、盛衰を挟みつつも継続して地域の開発行為が進捗していたことが背景の一端にあると考えられる。



写真1 2区北半 SR01 発掘状況 (南から)



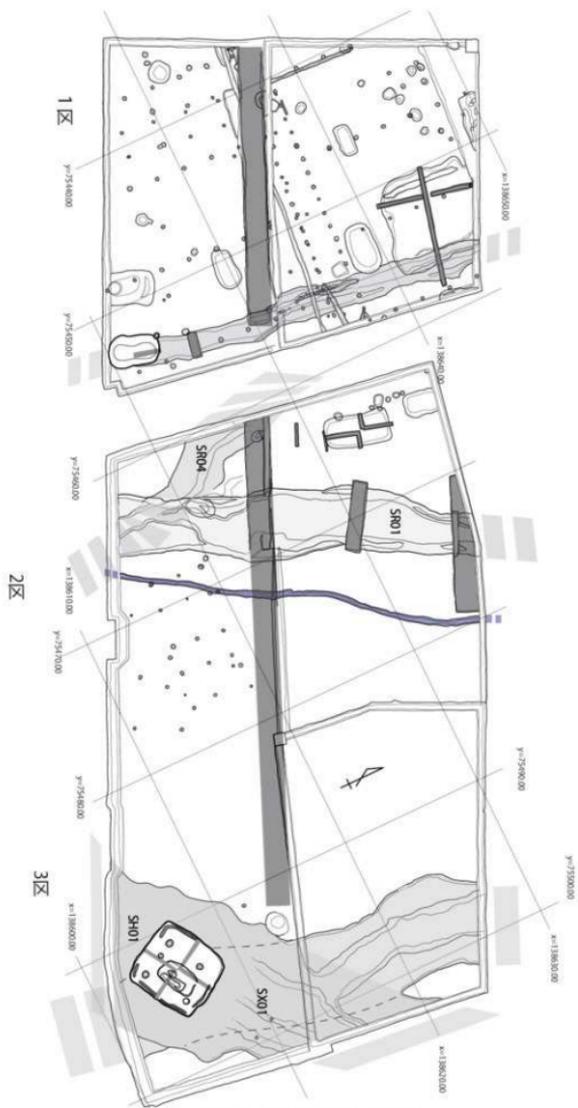
写真2 2区南半 SR01 中層土器出土状況 (北から)



写真3 3区 SH01 発掘状況 (北西から)



写真4 3区 SH01 中央土坑内壺・炭化材出土状況 (北東から)



第3図 遺構配置図(1 / 300)

きゅうれんべいじょう  
旧練兵場遺跡

普通寺市仙遊町一帯の微高地（標高約24m）に営まれた複合遺跡である。確認されている遺構は、縄文時代晩期の流路を最古として、中世の条里地割に合致する溝群が最も新しく、幅広い時期の遺構が確認されている。その時期幅の中で、最も集中して人々の生活が確認されたのは弥生時代中期から古墳時代後期にかけての時期である。集中して営まれた集落の範囲は約45万㎡と香川県下では最も広い。

今年度の調査は、普通寺病院の建替えに伴う附帯工事部分の調査で、平成25年6月から平成26年3月まで調査を実施した。調査区は6ヶ所設定し、調査総面積は合計1,009㎡である。主な遺構の総数は竪穴建物48棟、掘立柱建物5棟（現在検討中）、溝及び流路87条、土坑37基である。既往調査の成果を裏付けるものとなっている。主な調査区の成果は下記のとおりである。



第4図 遺跡位置図 (1/25,000)

1区

看護学校南側に設定した南北1.5m×東西122mの調査区である。主な検出遺構は、掘立柱建物・竪穴建物（弥生時代中期後半）、流路（弥生時代中期後半から古墳時代前期）、大溝（13世紀から14世紀）である。

SH1005は一边約4.5mで屋外排水溝が北側に接続する。SR1003は弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての流路で、幅3.5m、深さ0.45mを測り、埋土は5層に大別される。各層とも完形に近い土器が多量に投棄されている。この流路は北に蛇行しながら、2区のSR2002へと接続するものと考えられる。

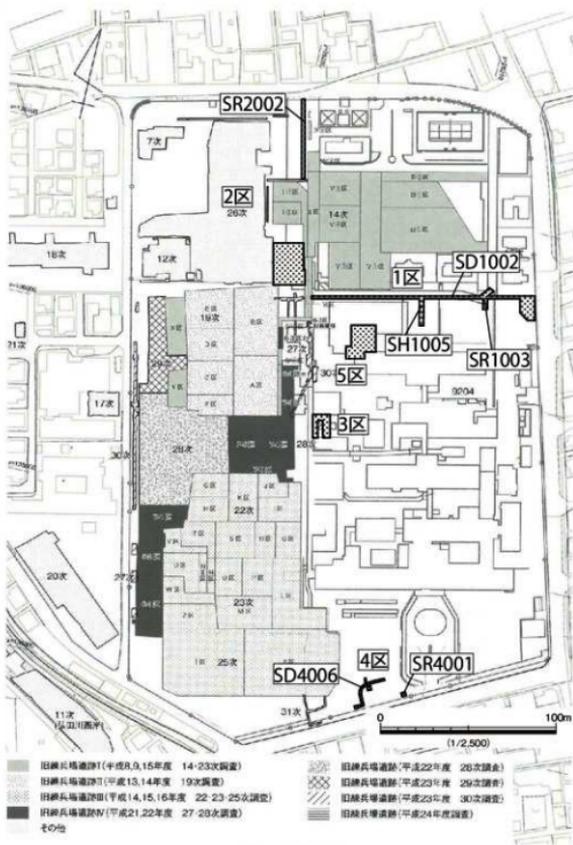
SD1002の流路は条里地割の坪境と合致し、幅6m、深さ0.45mを測り、南北方向に伸びる。



写真5 1区SH1005と北へ延びる屋外排水溝（北から）



写真6 1区SR1003 2層下位土器群（北から）



第5図 調査区割図 (1/2,500)

## 2区

看護学校と養護学校の間に設定した南北20m×東西14mの調査区(2-2区)、南北46m×東西1.8mの調査区(2-1区)である。主な検出遺構は、堅穴建物(弥生時代後期後半)、流路(弥生時代中期後半から古墳時代前期)、土坑(弥生時代後期)、大溝(古墳時代)、大溝(13世紀から14世紀)である。堅穴建物は今回の調査で最も大きく平面プランは円形を呈し、直径7.5m、支柱穴4穴、北側に張出が付属する。土坑(SK2004・SK2005)からは多量の土器が折り重なるような状態で出土した。その土坑内からは焼成に関連するような焼土や炭化物は出土していない。古墳時代の6世紀から7世紀の大溝(SD2007)は調査区を南西から北東方向へむけてほぼ一直線に伸び、幅1m・深さ0.5mを測り、南から北へと低くなっている。中世の13世紀から14世紀の大溝は調査区北西隅を南西から北東方向へと伸びるSD2020(幅1.8m・深さ0.9m)、調査区南東隅を南西から東へと延びるSD2009(幅1.8m・深さ0.9m)がある。SD2009の中層から瓦器類が出土している。またSR2002からは多量の土器が完形に近い形で出土し、1区で検出したSR1003に接続するものと考えられる。

## 4区

病院南側の県道48号線と近接する場所に設定した幅1m×総延長53mの調査区である。主な



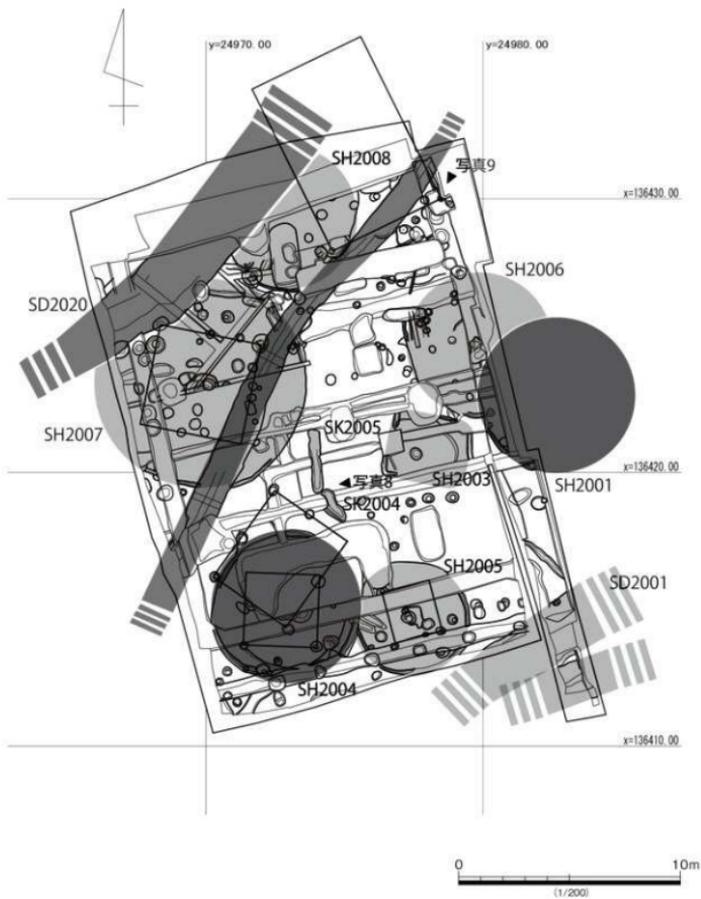
写真7 2区 SR2002 2層下位土器出土状況(南から)



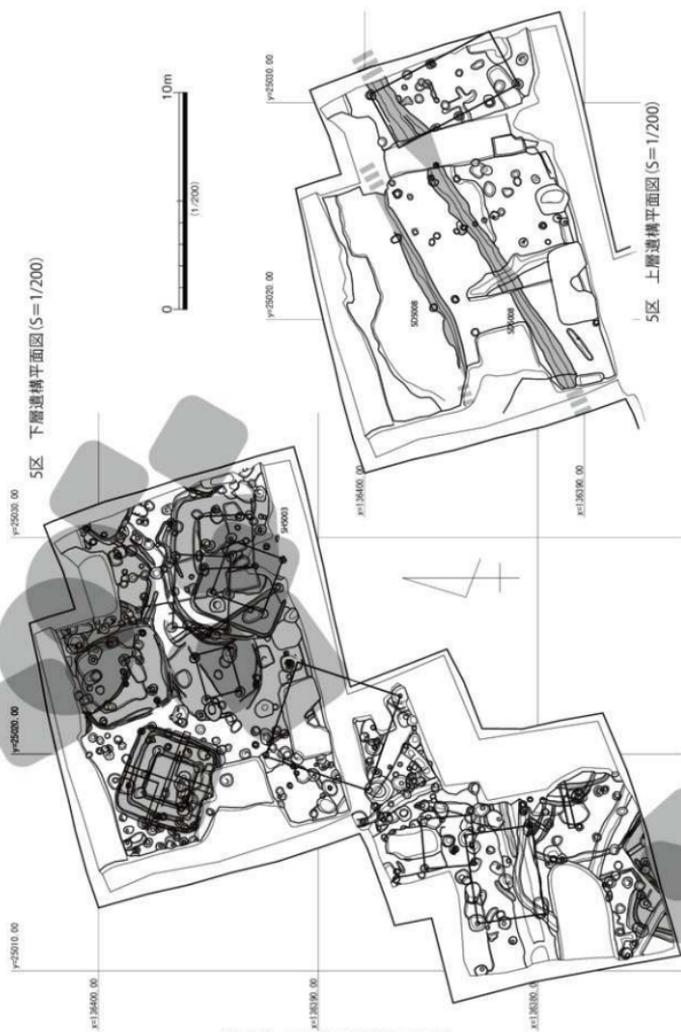
写真8 2区 SK2004・SK2005 遺物出土状況(東から)



写真9 2-2区遺構検出状況(北から)



第6図 2-2区道構配置図 (1/200)



検出遺構は、道（12世紀から13世紀）、流路（弥生時代中期後半から古墳時代後期）である。道（SD4006）は既往調査の東側の続きになる。路面幅は約3mを測る。この道は周辺の調査成果から条里地割の坪境にあたることが判明しており、今回は東西方向に伸びる直線部分と、北へと曲がるコーナー部分を確認した。構造は地面を大規模に開削した溝（幅5m・深さ0.5m）に、大小の円礫を敷き並べ、歩く路面となる部分には細かい砂や砕かれた遺物を敷きならべていた。

流路（SR4001）は、1区と2区で検出したSR1003とSR2002の南側の流路部分である。流路からは、SR1003やSR2002と同様に、多量の土器が出土し、古墳時代中期の層からは獣骨や滑石製の玉類、鉄鋌が出土した。鉄鋌は県下での出土は初となる事例である。

#### 5区

東西18m×南北13mと東西15m×南北11mの調査区である。主な検出遺構は掘立柱建物・竪穴建物（弥生時代中期後半から古墳時代前期）、溝（13世紀から14世紀）である。溝（13世紀から14世紀）は並行して2条あり、どちらも幅0.7m、深さ0.2mで断面形は逆台形を呈する。溝内には、備前焼播鉢・土師器皿・古瓦が投棄されていた。古瓦の中には軒平瓦が1点あり、瓦当文様は連巴である。

竪穴建物は20棟近くあり、平面プランは方形と円形を呈するものがある。また一つの竪穴建物（SH5003）は、4回から5回の建て替えがみられる。



写真10 4区道(SD4006)路面検出状況(東から)



写真11 4区SR4001中層下位鉄鋌出土状況(南から)



写真12 5区SD5008・SD5001遺物出土状況(東から)



写真13 5区SD5008軒平瓦出土状況(南から)



写真14 5区竪穴建物群完掘状況(東から)

おたはらたかす  
太田原高州遺跡

県道太田上町志度線建設に伴い、平成22年度から断続的に発掘調査を行っている。第3次の今年度は、平成23年度の第2次調査で確認された区画墓群の東側を調査した。弥生時代中期の区画墓2基、弥生時代後期後半の掘立柱建物3棟、古墳時代終末期の掘立柱建物1棟および性格不明遺構2基、古墳時代のもと考えられる竪穴建物1棟、溝状遺構9条などを確認した。

区画墓はいずれも第2次調査で確認できたものの続きである。区画墓3はSD02により東側を区画され、第2次調査の成果を合わせると東西5mの規模を持つことが確定した。南限は調査地外へ広がるため不明である。区画墓6はSD07

により北側を、SD04により東側および南側をそれぞれ区画され、東西10.5m、南北4.2mを測る。主体部は確認できなかったが、溝に囲繞される状況から区画墓と判断した。特に北辺中央部分で検出したSD03は入念に埋め戻されており、その後北辺のSD07が掘削されたことがわかり、前段の墓域を整理した可能性がある。この2基より東側に区画墓が広がる形跡が見られないことから、これをもって区画墓群の東限と判断した。弥生時代後期後半の各掘立柱建物は区画墓群の東限よりも東側で確認できる。このことは、前段



写真15 SD03遠景(北から)



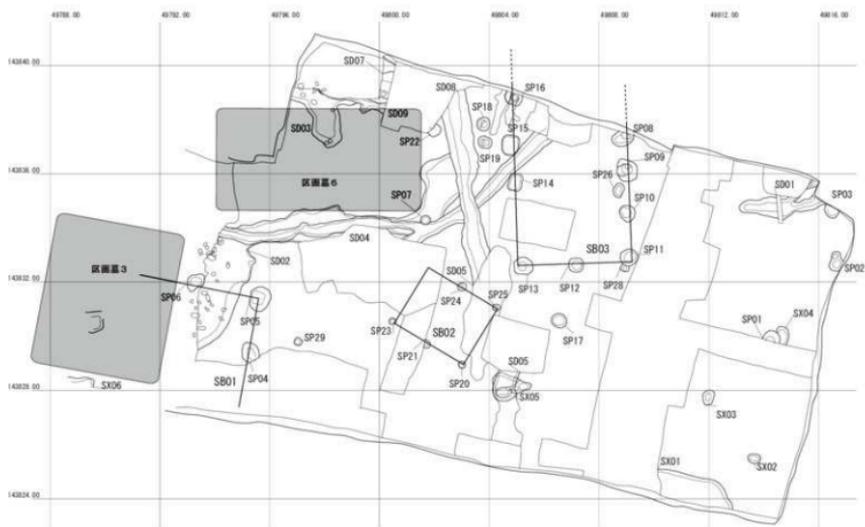
第8図 遺跡位置図 (1/25,000)

で形成された墓域が継続して意識されており、居住域が分けられていた可能性を示す。

古墳時代終末期の掘立柱建物はSB01第2次調査で一部検出しており、その連続を確認した。2間×3間の建物に復元できる。



写真16 区画墓6(西から)



第9図 遺構配置図 (1/160)

性格不明遺構のうち、SX05は正確な帰属時期は不明であるが、焼土・炭化物を交えており、何らかの焼成に関わる遺構であると考えられる。

調査期間中に周辺住民を対象とした説明会を開催した。



写真17 調査区全景(西から)



写真18 調査区全景(東から)

たひきはらにし  
多肥北原西遺跡

多肥北原西遺跡は東西約400mに渡り広がる遺跡で、平成22年度から系統的に調査が続けられている。遺跡東側では古墳時代後期の竪穴建物が確認された他、遺跡全体にわたり、古代の掘立柱建物・溝状遺構などが確認されている。特に、溝状遺構は東西約400mにわたり約10mの振れ幅の中で断続的に掘削される。それぞれの溝状遺構はすべて相互に平行せず、途中で交差したり直角に屈曲する。また、大規模な地震の痕跡である噴礫が2箇所以上確認されていることが特筆される。

今年度対象地は遺跡の西半中央付近に当たり、調査面積は1,233㎡を測る。基本層序は 1. 造成土、2. 耕作土、3. 床土、4. にぶい黄褐色砂質シルト、5. 地山である。

4層は今年度調査地のほぼ全面を覆う。明確な遺物を確認していないが、おおむね中世以降の堆積物と想定する。5の地山はパリエーションに富んでおり、灰色系砂礫あるいは黄色系砂質シルト～粘質土を認める。基本的に遺構面はこの地山上面である。但し、部分的に4と5の間に暗褐色砂質シルトを中心とする堆積層を認める。この層の堆積範囲は地山の検出レベルが低いことから、地山層堆積時に形成された低地部分が暗褐色系の堆積物によって埋没したものと考えられる。

溝状遺構は14条検出し、11条が概ね東西方向に主軸を持つ。SD02は調査地北側で検出した溝状遺構である。西端部では断面形状が浅い皿状を呈しているが、中央付近では深度約1mと深く掘削されている。埋土は4層程度に区分でき、中層から下層にかけて、握り拳大から人頭大の礫が多数認められる。浅い部分の地山は砂礫、深い部分の地山はシルトであることから、掘削しにくいところは浅く、容易に掘削可能な場所では深く掘削している可能性がある。深さに極端な差があること、砂質土の堆積が少なく、シルト質の土で埋積していることを考えると、灌漑などのために掘削されたとは考えにくい。出土遺物はわずかであるが、9世紀代の須恵器坏蓋が認められ、少なくともその時期以降には開削されていたことがうかがえる。

SD08は調査区中央付近で検出した溝状遺構である。検出面の幅は最大1.5mを測る。断面形状は椀状を呈し、残存深度は約0.3mを測る。西端では幅も狭く、深さもごく浅いが、中央付近では良好な残存状況を示す。埋土は暗褐色系の砂質シルトで上層に直径2cm前後の小礫がままとまっている場所が認められる。流水を示すラミナ状堆積などは認められない。

SD09は調査区南半で検出した東西方向の溝状遺構である。検出面での幅は最大2mを測り、残存深度は0.6mを測る。断面形状は椀状を呈する。埋土は概ね3層に分かれており、拳大～小児



第10図 遺跡位置図 (1/25,000)

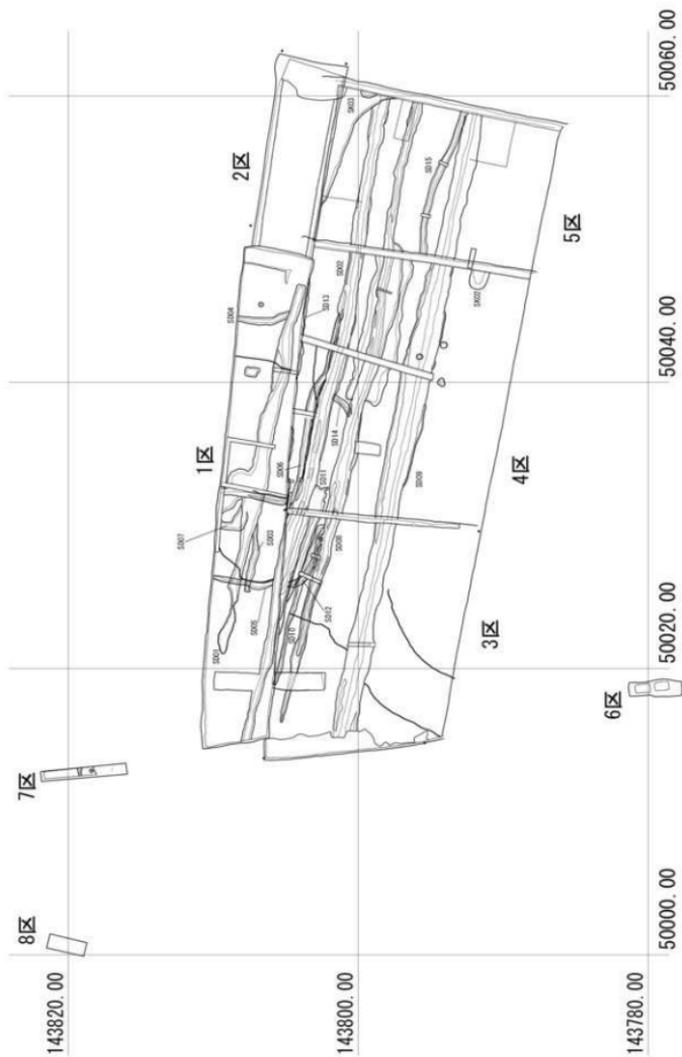
頭大の礫が顕著に認められる。埋没の状況もSD02と類似する。遺物は浅い皿状堆積からなる上層で9世紀代の須恵器坏蓋が、U字形の堆積からなる中層で8世紀後半の須恵器坏が、浅い椀状の堆積からなる下層で8世紀中頃の須恵器坏・土師器皿などが認められる。今回の調査区内では、11条の東西方向に平行して掘削される溝状遺構が確認できた。そのうち、SD01・02・08・09の4条についてはそれぞれ既往の調査で確認できた遺構との連続が認められる。見かけ上は平行して掘削されるこれらの溝状遺構は、SD02・09の2条が東側隣接地においてそれぞれ北と南に直角に折れ曲がる。SD01・08の2条は同じく東側隣接地においてその続きは追えなくなる。既往の調査で確認できている溝状遺構のあり方は比較的幅・深さともに安定して残存しているが、今回検出した溝状遺構は今年度の調査対象地東側で幅が狭く、深さも浅い傾向が認められる。SD09のみほぼ安定した規模で残存しているものの、SD01・02・08の3条はこの傾向が顕著である。これについては推測の域を出ないものの、本遺跡における溝状遺構の掘削方法に起因するのではないかと考える。すなわち、溝状遺構の残存状況の不良な場所は地山の礫層が現状で露出している部分に相当する。これに対して、安定した深さで掘削されている場所はシルト質の地山である。より掘削の容易な土質の場所ではしっかりと掘削し、掘削が困難な土質ではやや掘り控える傾向があったものと考えられる。東側隣接地（平成24年度調査Ⅱ区）では礫層が包含層直下で確認でき、場所によっては耕作土直下で礫層を確認することから、屈曲して確認できなくなる溝状遺構を除き、その痕跡が確認できないまま続きが不明になる溝状遺構が見られる理由は、この高い位置にある礫層に起因する可能性が考えられる。一方、これらの溝状遺構は埋土に大きな特徴がある。いずれも暗褐色系の砂質シルトで埋まっており、砂質土をほとんど含まない。また、溝状遺構の底部は一定方向への勾配が見られない。これらの状況は本溝群の性格が灌溉用の配水路ではなく、何らかの別用途であったことをうかがわせる。



左上 写真19 5区調査区全景（西から）

右上 写真20 4区SD09中層須恵器・礫出土状況  
（北西から）

左下 写真21 4区SD09断面（西から）



第 11 図 遺構配置図 (1/300)

## きしうえ 岸の上遺跡

丸亀平野東部を北流する大東川西岸の河岸段丘上に立地する遺跡である。遺跡周辺の標高は約22mで、周囲は平坦な水田が広がり、条里地割が明瞭に認められる。県道建設予定地延長約85mのうち、東側の官民境界工事対象となる幅4m、延長85m、面積340㎡の調査を実施した。

表層の現耕作土を除去すると、古代以後の遺構基盤となる灰褐色粘質シルトが北側を中心に堆積し、その層を除去すると弥生時代以後の遺構基盤となる暗褐色砂礫層または黄色シルト層がみられる。灰褐色シルト層は、調査区の北端で60cm厚、南端で5cm程度である。つまり旧地形は北に向かって緩やかに傾斜している。

灰褐色シルト層の上面では、条里地割に合致する方向の柱穴列を1列確認した。出土物から奈良～平安期の遺構と判断できる。灰褐色シルト層除去後に確認した遺構は、古墳時代後期の竪穴建物8棟、土坑1基、弥生時代後期の竪穴建物1棟である。このうち、古墳時代の竪穴建物には例外なくカマドが造られる。また、特定の竪穴建物から鉄器や鉄片類が多数出土した。さらに、白玉や管玉などの滑石製装身具も出土している。今後、古墳時代後期を中心とした集落の範囲の確認と営為の具体相を明らかにする必要がある。

また、調査地北端は歴史地理学でいう古代南海道推定線に合致するため、慎重に調査を行った。しかし、上記灰褐色シルト層との層位関係について解決すべき課題が残っており、当該年度の調査

としては未詳で終わった。次年度以降の調査を踏まえて、道路遺構の有無について、判断することとしたい。



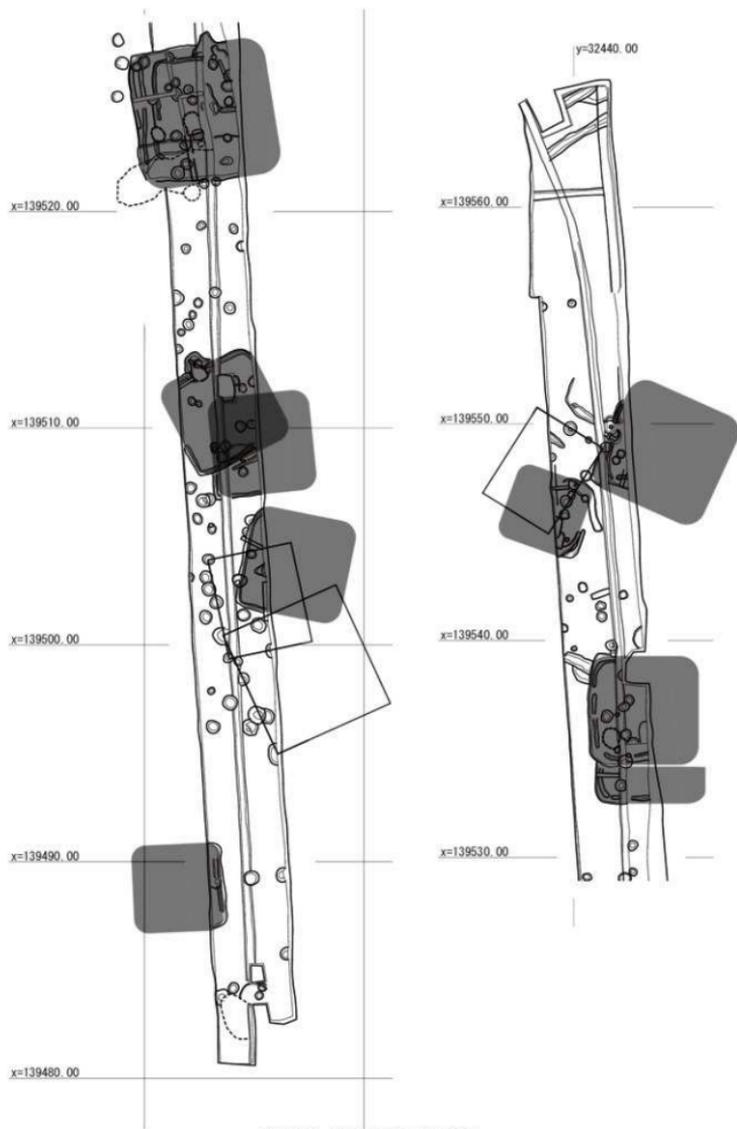
写真22 調査区北半部(南から)



写真23 竪穴建物のカマドから出土した甕(南から)



第12図 遺跡位置図(1/25,000)



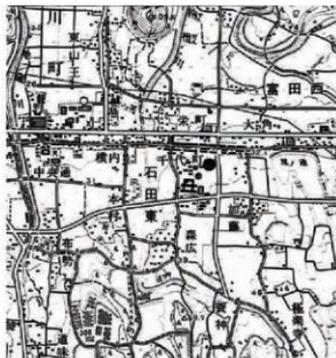
第13図 遺構配置図 (1/200)

いしだこうこうていない  
**石田高校校庭内遺跡**

耐震化スピードアップ事業による鶏舎移転および新設に伴い、校庭内の北東隅部を調査した。検出した遺構は竪穴建物13棟（弥生時代後期中葉1棟、弥生時代後期後半9棟、古墳時代終末期3棟）、掘立柱建物7棟（古墳時代終末期2棟、古代3棟、中世2棟）溝状遺構7条（弥生時代後期1条、古墳時代終末期3条、中世3条）、ピット多数を確認した。

遺構の残存状況は、調査地の西側1/3が後世の耕作に伴う地下げにより著しい削平を受けているものの、残り2/3は極めて良好である。

弥生時代後期の遺構は調査区のほぼ全面に分布する。竪穴建物についてみると、平面形は後期中葉のものが円形を呈する以外はいずれも方形である。主軸方位はほぼ真北を向くものと東偏するもの、西偏するものの3通りが確認できる。遺構の切り合いから見てより古いものは真北方向の主軸をとり、東ないし西へ主軸を振るものは新しい。後期中葉の円形住居は主軸方位が不明であるが、炉の主軸が東西方向に向くことから、古いものが真北方向に主軸を持つことと矛盾しないと考える。ほぼ同一の場所に作られたSH06とSH04はSH04の方が新しく、SH06を建て直したものと考えられる。多くの竪穴建物は床面直上にあまり遺物が残っておらず、廃絶時の片付けに伴い持ち出されたようであるが、SH04では少量、SH09ではやや多量のほぼ完形を保つ土器が出土した。特にSH09では南壁に沿うように小型の甕・鉢などが出土している。SH08によって大きく削平されているほか、住居北側の大半が対象地外へ延びるため、全体的な様相としては不明である。また、SH04ではベッド状遺構上面から甕や鉢がほぼ完形でそれぞれ1点ずつ出土している。



第14図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真24 SH04全景(北から)



写真25 SH09全景(北から)

古墳時代終末期の遺構も概ね調査区全面に分布する。竪穴建物は3棟検出しているが、最も残存状況が良好なものはSH01である。東西方向にやや長い隅丸方形を呈し、北壁中央付近に作り付けカマドを持つ。主柱穴は4基認められる。主軸はほぼ正方位である。南側に残存状況は不良であるが、ほぼ同時期のものと考えられるSH10が認められる。一方、ほぼ同じ時期のものであるが、主軸方位が東偏するSH07が西側に存在する。SK02に中央付近を壊されているほか、北半分は対象地外へ延びており、詳細は不明である。なお、SH07埋土からは、本来削平された弥生時代後期の竪穴建物に帰属していたと考えられる銅鏝が1点出土している。調査区西半では上記の竪穴建物と概ね同時期の大型の溝状遺構SD07を検出した。検出幅約3



写真26 SH01 全景 (南から)

m、深さ約1mを測り、平面形状は南西～北東方向へ湾曲する。地形は南東から北西方向へ緩やかに下っていることから、概ね等高線に平行するように掘削されていると判断できる。埋土は砂質土と粘質土の互層からなり、流滞水を繰り返す環境下にあったと考えられる。掘削された状況から自然流下したのではなく、人為的な掘削によると考えられ、幹線水路などの機能を想定しておきたい。



写真27 SD07 全景 (東から)

古代の遺構は調査区東2/3にまとも。但し、遺構の見られない西側は先述したとおり地下げを受けており、当該期の遺構が削平された結果を反映している。特筆すべき点は、大型の掘立柱建物が複数棟見つかったことである。うち、SB04は現状で東西11.5m×南北5.6mの5間×2間の規模に復元している。南壁および北壁に相当する柱列の柱間は概ね2.6mを測るが、東側の1間のみ約2mとやや間隔が狭く、別の建物の西壁が重複している可能



写真28 SB04 全景 (東から)

性もある。SB04の北側3mのところにはほぼ柱筋が揃うSB06が、西側約12mのところにはSB04の主軸と建物の主軸が揃うSB07がそれぞれ認められる。建物の主軸方位は、いずれも周辺の条里地割の主軸方位であるN4°Eであり、地割施工後の建物であるといえる。建物に伴うと考えられる遺物はほとんど確認できず、詳細な帰属時期は不明である。但し、後述する中世の溝状遺構および包含層中から蓮華文軒丸瓦並びに三重弧文軒平瓦の小片が出土している。

中世の遺構は調査区東1/3にまとまる。北側に溝状遺構や性格不明遺構が若干広がる。当該期の遺構は主に15世紀代のものを中心とするが、若干12～13世紀のものも存在するようである。掘立柱建物2棟を含むピット群と溝状遺構3条が主な遺構である。うち、掘立柱建物SB03は一边のみ確認しており、北側の調査地外へ延びるものと考えられるが、主軸方位が周辺の地割とは異なる。SB02は梁行2間×桁行4間の建物に復元できる。南端の桁行方向の柱間は他のものとは異なり、かなり間隔が広い。SD01は南北方向の溝状遺構である。検出幅が最大で約5m、深さは最深部で約0.7mを測る。この溝以西では当該期の遺構密度が低くなり、東側に遺構が集中することから、何らかの区画施設として機能していた可能性が想定できる。調査地の東側に南北方向の坪界線が想定できるが、そこからの距離が約60mとなることから、半町のラインではないと考えられる。

当遺跡は、周辺に存在する弥生時代後期を主体とする森広遺跡などとともに当該期の集落を考える上で重要な遺跡として認識されている。従来の調査成果から、今回の対象地は遺構密度が低く、弥生時代後期の集落域としては縁辺部にあたると想定していたが、今回の調査により集落域がさらに北・東の方向へ広がることが判明した。古墳時代終末期についても概ね同様のことがいえる。さらに古代においては調査地北側約100mにおいて南海道が推定されており、検出した大型掘立柱建物との関係が注目される。また、中世後半においては区画施設を伴う集落、あるいは居館などの存在を窺わせる状況が確認できた。



写真 29 SB02 全景 (南から)



写真 30 SD01 掘削状況 (南から)



## 2. 普及・啓発事業

### 1 展示

#### (1) 香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第1展示室	4月1日～9月10日、 12月18日～3月31日
続・発掘へんろー ー四国の中世ー	第1展示室	9月18日～12月15日
讃岐国府跡を探る4	第2展示室	4月1日～5月9日
平成24年度発掘調査速報展示	第2展示室	4月26日～7月5日
多肥の遺跡	第2展示室	5月20日～7月5日
夏休み子どもミュージアム お、寺へ行ってみよう。	第2展示室	7月16日～8月30日
中世讃岐人の器	第2展示室	9月5日～12月27日
讃岐国府跡を探る5 ー平成24年度の調査ー	第2展示室	1月9日～5月8日

第9表 展示一覧

一般			団体										合計
大人	子ども	計	団体数					構成員数					
			一般	高校 生	小・中 学生	幼 稚 園	計	一般	高 校 生	小・中 学 生	幼 稚 園	計	
1,401	233	1,634	15	0	7	0	22	423	0	386	0	813	2,447

第10表 入館者数一覧

#### (2) 香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数(人)
讃岐国府跡を探る4	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月14日～6月23日	667
讃岐国府跡を探る4	まんのう町琴南ふるさと資料館	7月17日～8月29日	50
讃岐国府跡探索事業展示	水のフェスティバル in 府中湖	10月6日	8,000
讃岐国府跡を探る4	坂出市郷土資料館	11月1日～11月30日	528
讃岐国府跡を探る4	観音寺市中央図書館	12月14日～12月25日	245
讃岐国府跡を探る4	綾川町生涯学習センター	1月15日～2月9日	203
高松市多肥の遺跡	香川県立文書館	1月21日～3月9日	1,596
讃岐国府跡を探る4	東かがわ市歴史民俗資料館	2月22日～5月18日	312
四国地区埋蔵文化財センター巡回展 続・発掘へんろー四国の中世ー	松山市考古館	4月27日～6月23日	2,229
	徳島県立埋蔵文化財センター	7月1日～9月8日	1,431
	徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月10日～3月16日	1,006
合 計			16,267

第11表 センター外展示一覧

## 2 現地説明会・地元説明会

	内 容	実施日	対象	見学者数
1	太田原高州遺跡現地説明会	5月18日	一般	60
2	岸の上遺跡地元説明会	5月25日	地元	130
3	西村遺跡地元説明会	9月14日	地元	35
4	新宮古墳地元説明会	11月2日	地元	50
5	石田高校校庭内遺跡地元説明会	12月15日	地元	70
6	讃岐国府跡地元説明会	2月9日	地元	70
7	讃岐国府跡現地説明会	2月9日	一般	230
8	讃岐国府跡探索事業報告会	3月2日	一般	200
合 計				845

第12表 現地説明会・地元説明会一覧

## 3 講師の派遣

### (1) 体験講座など

	依頼者	実施日	場所	内容	対象	人数
1	高松市埋蔵文化財センター	5月3日	高松市埋蔵文化財センター	土器作り	小学生とその保護者	20
2	高松市埋蔵文化財センター	6月2日	高松市埋蔵文化財センター	土器焼き	小学生とその保護者	20
3	高松市埋蔵文化財センター	6月9日	高松市埋蔵文化財センター	土器炊飯	小学生とその保護者	20
4	亀早地区民生委員児童委員協議会	6月9日	高松市立亀早小学校	勾玉づくり	一般	30
5	高松市香南歴史民俗郷土館	7月26日	高松市香南歴史民俗郷土館	ミニ埴輪作り	小学生	30
6	高松市香南歴史民俗郷土館	7月30日	高松市香南歴史民俗郷土館	縄文コースターを作ろう	小学生	20
7	高松市東植田コミュニティ協議会	8月6日	高松市東植田コミュニティセンター	ミニ埴輪作り	小学生	13
8	高松市香南歴史民俗郷土館	8月9日	高松市香南歴史民俗郷土館	古代鋳造体験	小学3年生以上	20
9	高松市香南歴史民俗郷土館	8月16日	高松市香南歴史民俗郷土館	勾玉を作ろう	小学生	20
10	2013さかいでまなどビアフェスティバル	11月9日	坂出市中央公民館	こども勾玉づくり教室	小学生	10
合 計						203

第13表 体験講座への講師派遣一覧

## (2) 学校

	学校名	実施日	内容	対象	人数(人)
1	高松市立香南小学校	6月15日	勾玉づくり	6年生親子	100
2	三豊市立詫間小学校	6月23日	勾玉づくり	6年生	164
3	高松市立前田小学校	6月25日	土器作り	6年生	30
4	観音寺市立大野原小学校	7月2日	勾玉づくり	6年生	90
5	高松市立多肥小学校	7月4日	地域の歴史	5年生	155
6	高松市立前田小学校	10月15日	土器焼き	6年生	30
合 計					569

第14表 学校への講師派遣一覧

## (3) その他

	依頼者	実施日	内容
1	かさの会(「かがわ長寿大学」平成20年度卒業生の同窓会)	4月9日	講演
2	三豊市文化財保護協会	4月19日	講演
3	高松大学	5月8日	講演
4	府中地区社会福祉協議会	5月11日	講演
5	三豊市財田町公民館	5月24日	講演
6	香川県文化財保護協会	5月29日	講演
7	高松市讃岐国分寺跡資料館友の会	6月7日	講演
8	坂出市史編纂所	6月15日	資料解説
9	三豊市財田町公民館	6月21日	講演
10	四国電源地域市町村連絡協議会	7月4日	講演
11	大野校区コミュニティ協議会	7月7日	講演
12	香川県中学校教育研究会仲善支部	7月29日	資料解説
13	高瀬町公民館	9月27日	講演
14	徳島市立考古資料館	9月28日	講演
15	讃岐竜馬会塩飽社中	9月29日	資料解説
16	高松市老人クラブ連合会	10月3日	講演
17	高知県南国市立国府公民館	10月17日	史跡案内
18	高松市埋蔵文化財センター	10月26日	講演
19	府中壮成大学	11月14日	講演
20	高松市檀紙地区地域おこし運営委員会	11月15日	講演
21	坂出市立林田小学校	11月26日	講演
22	高松大学生涯学習センター	12月14日	講演
23	観音寺市教育委員会	12月22日	展示解説
24	綾川町教育委員会	1月25日	展示解説
25	高松市教育委員会	1月26日	史跡案内
26	公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	2月9日	講演
27	古代山城研究会	2月16日	国府案内
28	高松市教育委員会	2月22日	国府案内

第15表 講演等への講師派遣一覧

#### 4 坂出市立府中小学校との連携授業（よろこび学習）

回	実施日	場所	内容	対象	人数(人)
1	4月19日	埋蔵文化財センター	施設見学	6年生	40
2	5月31日	讃岐国府跡周辺	遺跡見学	6年生	40
3	6月7日	府中小学校	授業（旧石器～弥生）	6年生	40
4	6月14日	府中小学校、新宮古墳	授業（古墳～平安）	6年生	40
5	7月5日	府中小学校	土器づくり	6年生	40
6	11月1日	府中小学校	土器焼き	6年生	40
7	12月6日	府中小学校	勾玉づくり	6年生	40
8	2月17日	讃岐国府跡	遺跡見学	4・5年生	68
9	2月18日	讃岐国府跡	遺跡見学	6年生	40
合 計					388

第16表 坂出市立府中小学校との連携事業一覧

#### 5 夏休み子どもミュージアム

7月16日～8月31日に夏休み子どもミュージアムを行った。

実施日	タイトル	講師	人数(人)
7月16日～8月30日	お、寺へいってみよう。	展示	
7月20日～8月20日	遺跡の自由研究サポートデスク	自由研究のアドバイス	-
7月22日	お、古代をたいけんしてみよう。	分銅形ペンダントづくり、ガラス玉づくり	16
7月25日	お、発掘してみよう。	発掘体験	14
8月1日	お、寺を見てみよう。	古代寺院の見学	2
8月8日	讃岐国府ジュニアミステリーハンター	讃岐国府跡の探索	5
合 計			37

第17表 夏休み子どもミュージアム実施事業一覧

#### 6 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を8回開催した。

回	実施日	タイトル	講師	人数
1	6月8日	「願い、かなえたまえ！～考古学で読み解く古代人の祈り～」	長井博志	22
2	8月10日	「讃岐国の古代寺院」	森下英治	28
3	10月12日	「後の人は讃岐国府をどう見てきたのか」	乗松真也	25
4	12月14日	「ため池の歴史」	木下晴一	23
5	2月8日	「讃岐国府が置かれた時代を知るために」	真鍋貴国	10
合 計				108

第18表 考古学講座一覧

## 7 文化ボランティア活動

文化ボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助などを行った。7名が登録し、12回、延べ29名が活動に参加した。

## 8 四国新聞への連載

四国新聞に「古からのメッセージ① 讃岐考古学タカラ箱」として、計50回の連載を行った。讃岐国府跡探索事業に関連した内容「讃岐国府跡を考える」(18回)、香川県内の著名な遺跡を50音順で紹介する「讃岐考古学あいうえお」(15回)、「続・発掘へんろ展」に展示する遺物を紹介する『「続・発掘へんろ」展の遺物から」(17回)で構成した。

## 9 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館	出版社・新聞社	個人・他	合計
遺物	1	0	18	0	25	44
写真・パネル	0	2	6	4	2	14
レプリカ・模型	0	0	0	0	0	0
合計	1	2	24	4	27	58

第19表 資料貸出・利用一覧(数字は件数)

## 10 職場体験学習

	学校名	期間	内容	人数(人)
1	高松市立香東中学校	9月9日～9月13日	職場体験学習	4
2	坂出市立坂出中学校	10月22日～24日	職場体験学習	4
3	坂出市立白峰中学校	10月29日～31日	職場体験学習	2
4	さぬき市立長尾中学校	11月13日・14日	職場体験学習	1
合 計				11

第20表 職場体験学習一覧

## 11 刊行物

- (1) 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成24年度』
- (2) 『いにしへの讃岐』78～81号
- (3) 報告会資料『讃岐国府を語る』
- (4) 『讃岐国府ミステリーハンター活動記録』
- (5) 讃岐国府探索マップ(改訂版)

## 12 ホームページ

ホームページ(<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>)の更新を随時行った。

トップページビュー数 23,715

### 13 資料の寄贈

(1) 安藤文良氏寄贈資料	讃岐国分寺古瓦資料など	940 件	5,241 点
(2) 田村久雄氏寄贈資料	陶窯跡群出土須恵器など	109 件	431 点
(3) 藤井富治女氏寄贈資料	備前焼大かめ	1 件	1 点

### 3. 讃岐国府跡探索事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成 21 年度から開始した讃岐国府跡探索事業は、今年度で 5 年目を迎えるとともに、後期計画の最初の年度となる。主な調査事業は、讃岐国府を巡る歴史環境を明らかにすることを目的として県内全域の南海道調査と新宮古墳確認調査を、讃岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。讃岐国府跡を活用した情報発信による主な広報活動事業は、まちあるきや事業成果報告会を開催した。

#### 調査事業

平成 21 年度より実施している南海道については、平成 24 年度までに県内の現地踏査を終えたことから、今年度は官道推定ラインの再抽出を試みた。南海道推定ラインについては、既に糸里型地割含まれる余剰帯から推定されているが、改めて都市計画図を使用しながら県内全域に再抽出を行った。官道推定ラインは既往の学説を再確認するものであったが、一部の地域では埋没旧河道を境にして糸里型地割にズレが認められるなど、糸里施工段階の地形環境を推定できる資料が確認された。これらの成果については、次年度以降、調査報告書を刊行する予定となっている。

讃岐国府跡関連遺跡の調査では、国府成立前史の綾北平野の政治動向を探ることを目的として、大型横穴式石室を内部主体にもつ新宮古墳の測量調査を実施した。調査の結果、新宮古墳は一辺が約 21m の方墳であり、石室構造や規模は穴薬師古墳や醍醐 3 号墳と同規格であることが明らかになった。築造年代は、7 世紀初頭と考えられ、綾北平野の他の巨石墳とほぼ同時代と推定された。新宮古墳の調査成果については、『讃岐国府跡探索事業調査報告平成 25 年度』として調査報告書を刊行しているので、そちらを参照していただきたい。

讃岐国府跡の発掘調査は、昨年度に確認された国衙北限に対応する西側の区画施設の検出を目的として、国府城南部、開法寺伽藍東側の微高地上にて 220m の確認調査を展開した。調査の結果、開法寺伽藍と国衙を区分すると考えられる奈良時代から平安時代の大溝や欄列と、その東側で超大型を含む同時代の建物群を確認した。前者は昨年度の国衙北限に対応する区画施設と考えられるが、溝の条数を違えていることなどから、今後の検討の余地を残している。

#### 1. ボランティア活動

・登録人数	26 人
・延べ人数	358 人

#### 2. 地域との交流

・「第 14 回 水のフェスティバル in 府中湖」讃岐国府史跡ウォーク (10 月 5 日)	6 人
・「第 14 回 水のフェスティバル in 府中湖」展示 (10 月 6 日)	8,000 人
・新宮古墳地元説明会 (11 月 2 日)	50 人

・府中小学校4・5年生 讃岐国府跡見学(2月17日)	68人
・府中小学校6年生 讃岐国府跡見学(2月18日)	40人
・府中小学校6年生との連携授業(4月19日、5月31日、6月7日、6月14日、7月5日、11月1日、12月6日)	各40人
<b>3 情報発信</b>	
・ホームページへの記事掲載	32回
・情報誌「いにしへの讃岐」への記事掲載	2回
・新聞への連載記事掲載	18回
・地元ケーブルテレビガイドブックへの記事掲載	6回
・庁内掲示板への掲載	2回
・NHK出演	1回
・RSK出演	1回
・TSC出演	1回
・KBN出演	1回
・四国新聞掲載	6回
・読売新聞掲載	1回
・毎日新聞掲載	3回
・朝日新聞(東京版)掲載	1回
<b>4 関連行事</b>	
・まち歩き「讃岐国府を歩く 国司さまご一行ご案内いたします！」(7月21日)	13人
・まち歩き「古代の県庁 讃岐国府に迫る! 道真が漢詩に詠んだ国府を歩く」(9月8日)	10人
・まち歩き「古代の県庁 讃岐国府に迫る! 讃岐国府跡と新宮古墳を歩く」(9月22日)	7人
・まち歩き「古代の県庁 讃岐国府に迫る! 南海道を歩き讃岐国分寺に参る」 (10月13日・11月17日)	12人
・まち歩き「古代の県庁 讃岐国府に迫る! 崇徳上皇の足跡を歩く」(10月27日)	6人
・展示「讃岐国府跡を探る4」(4月1日～5月9日)	477人
・展示「讃岐国府跡を探る5」(1月9日～3月31日)	615人
・出張展示「讃岐国府跡を探る3」東かがわ市歴史民俗資料館(4月1日～5月7日)	208人
・出張展示「讃岐国府跡を探る4」高松市讃岐国分寺跡資料館(5月14日～6月23日)	667人
・出張展示「讃岐国府跡を探る4」まんのう町琴南ふるさと資料館(7月17日～8月29日)	50人
・出張展示「讃岐国府跡を探る4」坂出市郷土資料館(11月1日～11月30日)	528人
・出張展示「讃岐国府跡を探る4」観音寺市立中央図書館(12月14日～12月25日)	245人
・出張展示「讃岐国府跡を探る4」綾川町生涯学習センター(1月15日～2月9日)	203人
・出張展示「讃岐国府跡を探る4」東かがわ市歴史民俗資料館(2月22日～4月1日)	174人
・考古学講座「後の人は讃岐国府をどう見てきたのか」(10月12日)	25人
・考古学講座「讃岐国府が置かれた時代を知るために」(2月8日)	10人
・出張講座 かさの会(「かがわ長寿大学」平成20年度卒業生の同窓会)	

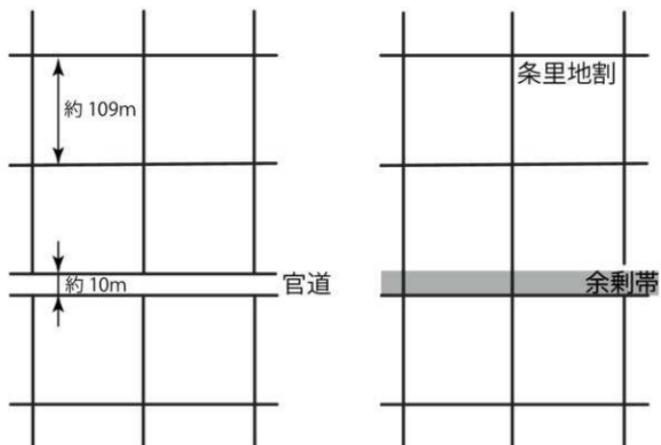
	「讃岐国府跡発掘調査の成果について」(4月9日)	25人
・出張講座	府中地区社会福祉協議会総会「讃岐国府跡の発掘調査について」(5月11日)	80人
・出張講座	高松市讃岐国分寺跡資料館友の会「讃岐国府跡の発掘調査成果」(6月7日)	50人
・出張講座	四国電源地域市町村連絡協議会「讃岐国府の発掘調査の成果について」(7月4日)	24人
・出張講座	讃岐竜馬会塩飽社中「菅原道真が漢詩に詠んだ国府」(9月29日)	9人
・出張講座	高松市老人クラブ連合会「讃岐国府について」(10月3日)	165人
・出張講座	高松市歴史資料館「讃岐国府を考える」(10月26日)	80人
・発掘調査現地説明会(地元対象)	(2月9日)	70人
・発掘調査現地説明会(県民対象)	(2月9日)	230人
・現場見学	ふるさと探訪(1月26日)	82人
・現場見学	古代山城研究会(2月16日)	16人
・現場見学	屋嶋城跡調査整備会議事業(2月22日)	5人
・シンポジウム	「平成二十五年度讃岐国府跡探索事業成果報告会 讃岐国府を語る」(3月2日)	200人

#### 5 刊行物

・『讃岐国府探索事業	ミステリーハンターのまち歩きガイド	300部
・シンポジウム資料	「平成二十五年度讃岐国府跡探索事業成果報告会 讃岐国跡を語る」	400部
・讃岐国府探索マップ	(改訂版)	3000部



## 讃岐国の南海道



## 官道と条里地割

第 16 図 条里地割と余剰帯



第17図 条里地割と南海道推定ライン（丸亀市飯山町）

### Ⅲ 讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告

#### 1. 讃岐国府跡発掘調査（第31次）

調査期間 平成25年10月21日～

平成26年3月14日

調査面積 220㎡

調査概要

##### ・主たる検出遺構と年代

建物跡 8棟以上(礎石建物1棟を含む)

奈良時代～鎌倉時代

堀跡 2基 奈良時代～平安時代

溝跡 1条 奈良時代～平安時代

##### ・主たる出土遺物

須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・古瓦・

鉄器(整理箱76箱)

##### ・調査地位置と調査方法

調査対象地は、讃岐国府城南部の微高地上であり、白鳳期創建とされる開法寺跡の東側に位置する。調査前の土地利用形態は、全て水田である。平成24年の第30次調査で確認された国衙北辺を区画する溝・堀跡に対応する国衙西辺の区画施設の検出と、国衙内部の建物配置の確認を目的として調査を行った。

##### ・主たる遺構の概要

###### 飛鳥時代(7世紀中葉～末葉)

各トレンチで真北を基準とした柱穴・大型土坑を検出した。建物6は、7世紀中葉の東西棟の建物である。平成23年度調査で確認した同様の方位をもつ建物群が一定規模の広がりをもつことが明らかになった。

###### 奈良時代から平安時代初頭(8世紀～9世紀前葉)

31-1トレンチ東部で、開法寺伽藍と国衙を分ける遮蔽施設を構成する大溝1・欄列を検出している。大溝1は糸里型地割の方位をもち、奈良時代初頭から平安時代中頃まで機能している。これらは、昨年度調査で確認した国衙北側の遮蔽施設に対応した西側の遮蔽施設と考えられる。大溝1の東側(国衙側)において建物1・建物3を検出している。建物1は柱穴掘り方からみて国衙内の大型建物となる。

###### 平安時代(9世紀～10世紀)

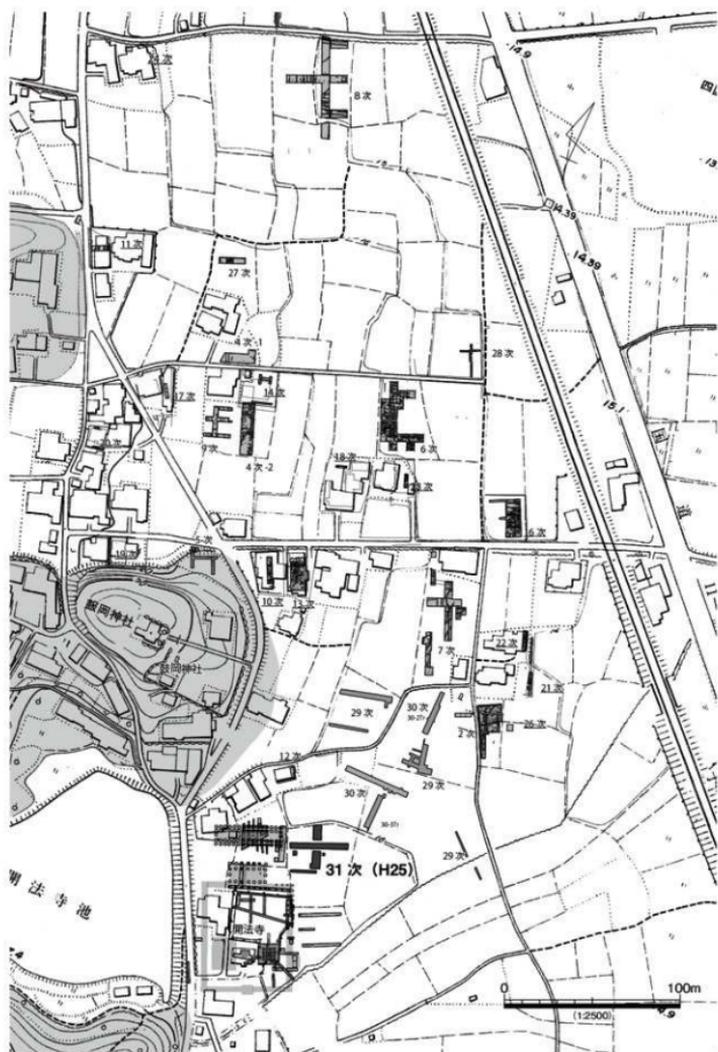
国衙内部の建物群は継続し、建物5・7は検出位置からみて奈良時代の建物1からの建て替えを想定できる。国衙内における中心的な建物が同一地点で継続することを示している。建物5は、9世紀末葉



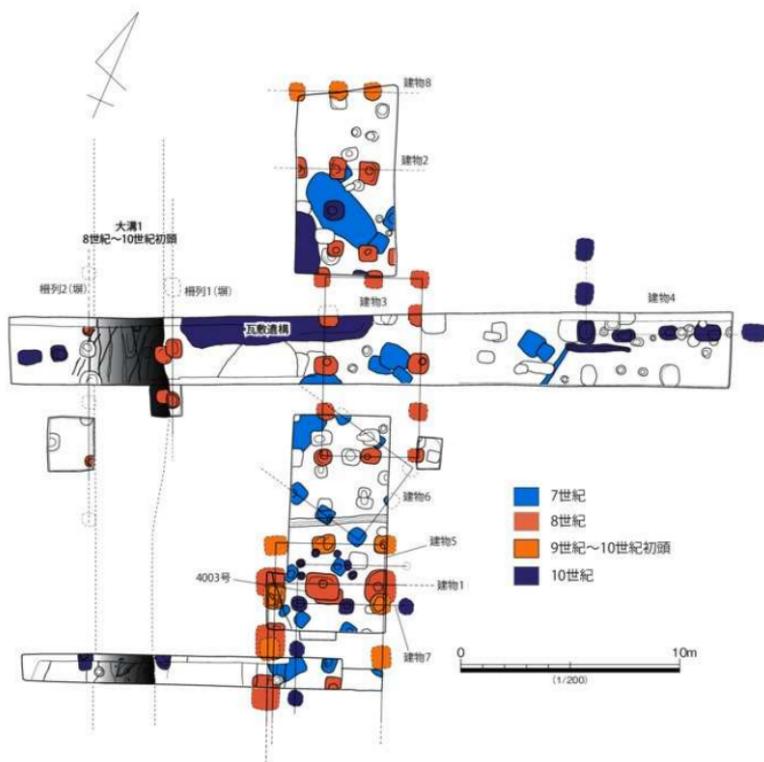
写真31 調査地の遠景



写真32 大溝1(南東から)



第18図 讃岐国府跡における既往の調査区 (1/2,500)



第19図 遺構平面図



写真33 建物2全景 (西から)



写真34 建物1 4003号柱穴断面 (北から)



写真35 建物1・5・7全景（東から）



写真36 建物4上面の瓦溜り（東から）



写真37 建物4全景（東から）

段階に礎石建物に改築されている。建物7・10等、10世紀中頃に廃絶する建物は、柱抜き取り穴に焼土・炭化物を多く含むことから、火災等が廃絶要因として考えられる。本時期以降の遺構は一切検出していない。

#### ・まとめ

今年度の発掘調査では奈良時代から平安時代の国衙西辺を区画する遮蔽施設と、その内部において建物群を検出した。昨年度の調査成果を合わせると国衙北・西辺を確認したことになる。国衙内部では建物1の継続して建て替えられる大型建物を検出した。今後、調査を継続することにより、国衙の詳細な規模や内部の建物配置を更に明らかにし、適切な保護措置を採るための資料を得ることが必要である。

## 2. 讃岐国府跡整理作業

讃岐国府跡における過年度の発掘調査の内、昭和52年度から昭和56年度調査分(国庫補助事業)について、調査報告書作成のための遺構図のトレース、実測遺物の抽出作業を行った。整理箱で485箱の出土遺物が整理作業対象となり、建物跡などの遺構出土資料を中心にして、600点程度の抽出を行った。次年度以降、図化作業に移行する予定である。



写真38 5次調査（昭和54年度）の総柱建物



写真39 6次調査（昭和55年度）の築地基壇

## 3. 新宮古墳の確認調査

平成21年度から開始した讃岐国府跡探索事業では、讃岐国府跡の発掘調査と並行して、国府周辺の地理的・歴史的環境を明らかにすることを目的とした地名・地形等の調査を実施してきた(香川県教委2011,2013)。平成24年度からは、讃岐国府設置に係る歴史的な経緯を明らかにすることを目的に、国府周辺に多く分布する大型横穴式石室墳の測量調査を開始した。平成24年度は、穴薬師(綾織塚)古墳の測量調査を実施しており、その成果は既に報告済である(香川県教委2013)。平成



写真40 石室全景（西から）

25年度は、新宮古墳を調査対象とするとともに、過去に確認調査が実施されている醍醐3号墳の再整理を行い、合わせて調査報告書を刊行した。

調査は、平成25年9月30日に開始し、11月2日に地元対象の説明会を行った後、現地を撤収した。また、新宮古墳の測量調査は、讃岐国府跡ボランティアの参加を得て実施している。

#### ・調査の概要

##### 墳丘

新宮古墳は、綾北平野の南部に位置し、南方の丘陵から北へ派生した標高約30mの尾根上に築造されている。同一の尾根の南東側約200mには小規模な横穴式石室をもつ仏坂古墳、谷筋を挟んだ約300m東側の尾根上の果樹園には新宮東古墳が存在したとされるが、現状では明らかではない。これら2基の横穴式石室墳の詳細は不明であるが、加茂古墳群や醍醐古墳群のような群集傾向は採らない。

墳丘は北側の丘陵先端部から約20m南へ離れた位置に築造されており、尾根の幅一杯に墳丘を乗せている。現状で墓地造成や砕石事業に伴い、丘陵・尾根の改変が進んでいるが、墳丘南部の「忠魂堂」と呼ばれる建造物を境にした南側は、元来急傾斜の丘陵となっていたようであり、墳丘は傾斜変換点付近に設けられていると考えられる。古墳後期から終末期古墳に多くみられる所謂「山寄せ」の立地ではない。

横穴式石室の開口方向は西側であり、その延長線上には城山城明神原がある。北側の綾北平野全域を見渡す方位は採らない。

測量調査は、最小限度の樹木の伐採と落葉を除去したのち標高測量を行った。また、標高測量にはトータルステーションを使用し、そのデータから図化ソフト上で等高線を発生させた。

墳丘形態については、残存状態が良好な南側の状況や墳頂部付近の上位の等高線の状況から方墳と考えられる。墳丘規模は、南東部尾根斜面が決める箇所や西側の等高線の張り出し、石室床面レベルなどからみて、一辺が約21mの規模を推定しておきたい。

また、開口部となる西側については、テラス面の状況や前庭部を示唆する須恵器群の出土位置との関係から、最低1段の基壇状施設が設けられていた可能性がある。

##### 横穴式石室

横穴式石室の図化の方法は、前室・羨道部の壁面は手書き実測を行っているが、玄室については左側壁上部を中心に倒壊の危険性がみられたため、トータルステーションの補正機能を活用した写真実測を行った。床面平面・断面については、全てトータルステーションによる図化を行っている。

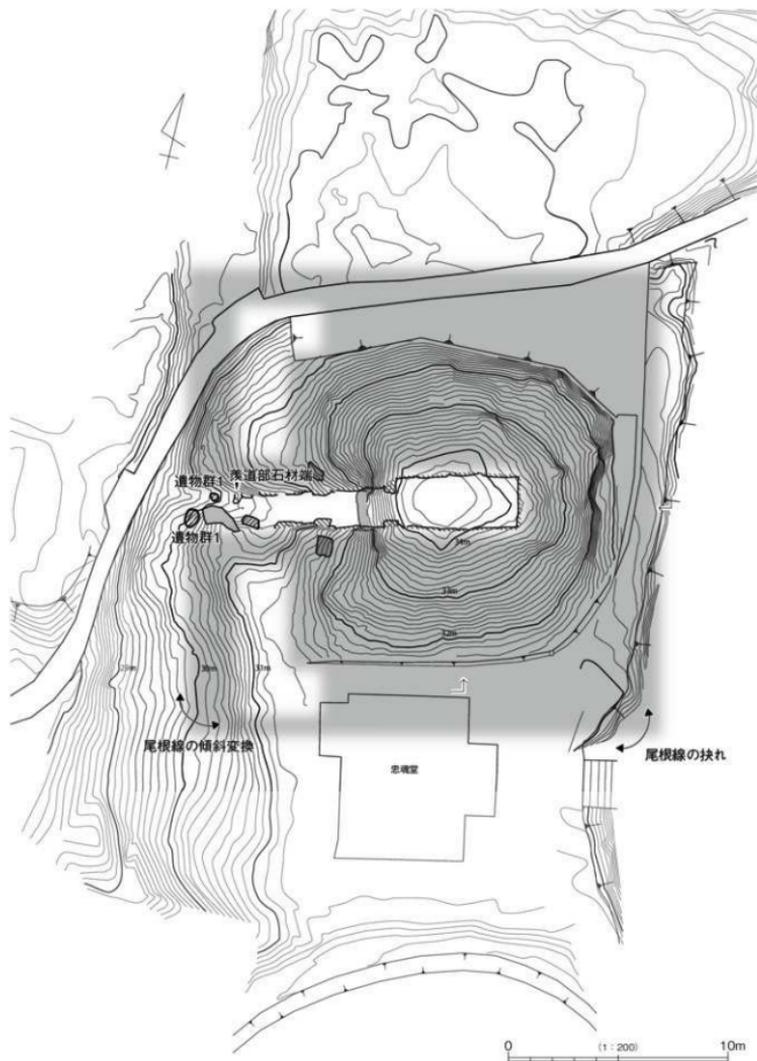
横穴式石室は、羨道部と前室界、前室と玄室界に



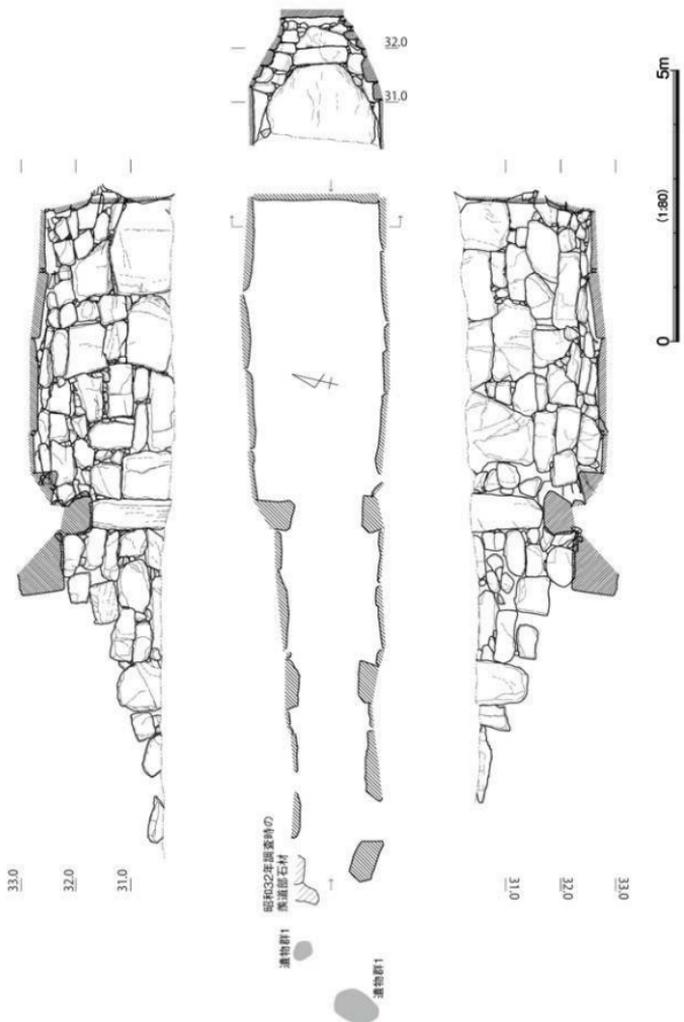
写真41 玄室全景 (西から)



写真42 玄門全景 (東から)



第20図 新宮古墳墳丘測量図



第21図 新宮古墳石室実測図

立柱石をもつと同時に前壁石材が一段下がる複室構造をもつ。現状での石室全長は、約11.8mを測るが、昭和32年調査時で確認された羨道部右側壁を合わせて考えると、石室全長は13mを測る。石室石材は奥壁最下段の安山岩製の大型石材や玄門部立柱石を除きほぼ花崗岩から構成されている。玄室は全長5.5m中央部での幅2.5mであり、長幅比がほぼ1:2の緩い扇張りの長方形を呈する。床面積は、12.8㎡である。天井石は4枚の花崗岩の大型石材から構成されており、現状で高さ2.3～2.5mを測るが、水平には高架されており、玄門部付近が若干持ち上がる。側壁は、基底石に大型石材を用いる点は共通するが、左側壁の方が上部まで大型の石材を用いており、左右で段数が異なる。横断面の形状は、下より2段目までは垂直積みに近く、それより上位では持ち送りが顕著となる。

玄門部は内側に迫り出す高さ1.5m・幅0.5mの立柱石が一段下がるマグサ構造をもつ天井石を直接支持する形となるが、右側の立柱石はマグサ構造となる天井石と僅かな接点しか持ちえておらず、専ら墳丘盛土でそれを支持する形であり、醍醐3号墳や穴薬師(綾織塚)古墳でみられるような、立柱石と天井石との間に玄室・前室側壁と共有する石材を介していない。前壁は、立柱石上位のマグサ石と小型の合石を介して別の石材が積まれた2段構成となる。

玄門立柱石から約2.5m開口部側の両側壁には、内側へ張り出すように据えられた中型の石材があり、前門立柱石と考える。前室幅は、玄門部付近で約1.8m、前門部付近で約1.65mを測り、玄門部寄りの天井石が1枚残存しているが、これより羨道部側では失われている。羨道部については、右側壁2段、左側壁1段のみ確認でき、右側壁の最前列の石材は長辺が内側に傾き、後世の移動を受けている可能性が高い。玄室の床面のレベルから判断して、下位にもう1段の基底石が遺存していると考えられる。

#### まとめ

新宮古墳、穴薬師(綾織塚)古墳、醍醐3号墳は、石室形態や出土遺物からみて、TK43型式併行期末葉からTK209型式併行期の短期間に一定の規範の下に築造された方墳であると考えられる。

当該期の綾北平野では、仏願1・2号墳やサギノクチ1号墳(井上・玉城1982)など玄室床面積10㎡以下の小型の横穴式石室墳が、綾川を介して大別した場合に2群に分かれて分布するが、この3基はこれらの上位階層墳に位置付けられる。讃岐地域全体の横穴式石室墳にみられる階層構造は、腕貸塚古墳→平塚古墳→角塚古墳へ累代的な築造が行われ墳丘・石室規模ともに絶対的な存在と言える大野原古墳群を頂点としていることは明らかであるが、その一方で、綾北平野のような中・小地域での階層構造が問題となろう。綾北平野の大型石室墳群が累代的に築造されたものではなく、短期間に同時多発的に築造された意味については、7世紀初頭を前後する時期に綾北平野が急速に重要視されたという点を認識しつつ、古墳群データの充実を行いつつ、後続する記念物である城山城、そして讃岐国府との歴史的脈絡を追及していくことが重要である。

大久保徹也 2009「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典遷厝記念論集 考古学と地域文化』一山典遷厝記念論集刊行会

大久保徹也 中島美佳 2009「石ヶ鼻古墳 御暁天神社古墳」高松市教育委員会

川畑迪・渡部明夫 2008「坂出市新宮古墳出土須恵器について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』

廣瀬常雄編 1986『醍醐3号墳発掘調査報告』香川県教育委員会

松本敏三 1985『原始・古代編』『観音寺市誌 通史編』

- 久保田昇三 2008『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書』観音寺市教育委員会
- 久保田昇三編 2009『香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書』観音寺市教育委員会
- 川畑通・渡部明夫 2008『坂出市新宮古墳出土須恵器について』『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター
- 香川県埋蔵文化財センター 2010『Ⅲ讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告』『香川県埋蔵文化財センター年報平成 21 年度』
- 香川県埋蔵文化財センター 2011『讃岐国府跡探索事業 平成 21・22 年度 地名・地形調査報告』
- 香川県埋蔵文化財センター 2013『讃岐国府跡探索事業調査報告平成 23・24 年度』
- 坂出市史編纂委員会 1988『坂出市史資料編』
- 山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究 - 中国・四国編 -』1984 年度文部省科学研究費奨励研究 A 実績報告書

## IV 調査研究

### 1. 川北遺跡の古代集落とその変遷

長井博志

#### (1) はじめに

川北遺跡は東かがわ市引田に所在する弥生時代～中世にかけての集落遺跡である。これまで四国横断自動車道や県道の建設に伴って発掘調査が行われ、前者については報告書が刊行されている(1)。本遺跡で注目できるのは7世紀後半～8世紀中葉にかけて営まれた官衙的な特徴を帯びた集落跡であり、本稿ではこれについて検討する。

さて、この集落跡を構成する遺構・遺物の大多数は四国横断自動車道調査区I区で確認された。このため本稿では遺構・遺物の検討は基本的にI区のみとした(当該期に属する明瞭な遺構が確認されていない四国横断自動車道調査区のI区以外の調査区[II～IV区]と報告書が未刊行の県道調査区[V区]は取り上げていない)。

次いで本遺跡に関する既往の考察や研究を紹介する。これには調査概報(2・3)と報告書(4)などがある。まず、調査概報(5)であるが、下記の5点を述べている。

- 本遺跡の周辺には古墳時代後期に属する川北1号墳や沖代水田遺跡が所在する。また、古代官道である南海道は本遺跡が所在する引田を通過していた。
- 掘立柱建物跡は床面積が40㎡に近いものがあり、相対的に大型建物の部類に属する。
- 建物跡の床面積や柱間距離に近似するものがある。また、建物跡の桁行や梁行の方向を揃えるものが認められる。
- 建物配置や規模には30cm前後の基準尺の存在が想定される。
- 方向を揃える建物群は日本測地系の座標北から4°ほど西に振った方位を基準として建てられている。これは遺跡の南側に広がる条里型地割の方向と合致する。そして、真北・磁北のどちらでもなくこの地域独自の方向であることから両者に関連がある可能性が高い。

次に報告書(6)であるが、次の5点を述べている。

- 川北遺跡の周辺地形から見て、I区は微高地縁辺部の居住に適さない地点である。このためI区の掘立柱建物群で構成される集落跡は自然発生的なものとは考えにくい(II～IV区は微高地頂部付近に位置するが、明確な居住遺構は検出されていない)。
- 本建物群は付近の条里型地割と主軸方向を揃えることにより、建物間の方向を揃え、企画的な配置をとる。
- また、建物群の特徴として以下がある。
  - 大きな柱穴跡をもつ。
  - 宮殿や官衙などの建物で選択的に利用されるヒノキの柱材が多く見られる。
  - 柱間距離は7尺(2.12m)のものが多く、基準尺の存在が想定される、など。これらの様相は官衙のそれに近い。

エ、上記の遺跡立地と建物群の官衙の様相より、この建物群の成立には特殊な意義がある。

オ、以上のような遺構の様相と合わせて、周辺の地理的環境・歴史的環境や条里型地割の分布を検討すると、川北遺跡の建物群は南海道引田駅に伴う駅戸集落の可能性がある。

このように報告書では概報での指摘に基づきながら新しい所見を加えて、本遺跡の官衙の様相を地域の歴史の中で評価している。私も本遺跡に官衙の様相が見られるという点では同意見であり、これらの成果から本遺跡は古代の地域権力による支配構造や支配の実態を検討する上で重要な資料であると考えられる。

ただ、一方で私はこうした検討の前提となる集落様相の変遷について、報告者とは異なる見解をもつ。このため遺跡の評価に関する私見は改めて提示することとし、本稿では集落の変遷について考察する。

## (2) 集落変遷の分析方法

まず、I区の遺構・遺物の内容であるが、検出遺構には掘立柱建物12棟・櫓列1基・溝状遺構10条などが、出土遺物には7世紀後半～8世紀中葉に属する多量の須恵器・土師器がある。また、ごく微量であるが、円面硯2点・土馬脚1点という官衙系遺物、ウシカウマの歯も出土している。

これらの遺構の変遷を検討する上で前提となるのは、下記の状況である。

- ・掘立柱建物から出土する土器はごく少量かつ小片であるため、これにより建物の詳細な所属時期を決定することはできない。ただ、その多くは7～8世紀代に属する。
- ・I区出土遺物の大多数は7世紀後半～8世紀中葉に位置付けられる。また、この時期に属さないものは弥生時代後期・10～11世紀代であり、年代が大きく異なる。
- ・このため建物跡の多くは7世紀後半～8世紀中葉にかけて存続したと考えられる。

### 【報告書の見解】

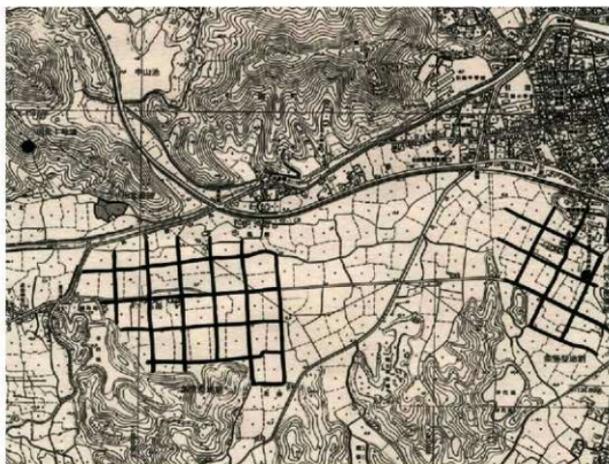
報告書における遺構変遷の分析方法と結論は下記のとおりである。

- (1) 遺物出土量が多い遺構を抽出し、所属時期と変遷を判断する。
  - ①期 SD05 [7世紀中葉] → ②期 SD06 [7世紀中葉～8世紀前半] → ③期 SD08 [8世紀前半] の3期の変遷)
- (2) 建物群のうち、重複・近接度が高く、最も密に分布する4棟 (SB01・SB03・SB04・SB09) を同時併存の可能性が高い2群に分離する (7)。
- (3) その上で遺構間の関係 (例えば、SD01～SD03がSB01の区画溝と見られる)、遺構の重複や切り合い関係、出土遺物の年代観や残存率といった要素を加味し、下記のように結論づけている。
  - ①期 (SA01)、SD04・SD05……7世紀中葉
  - ②期 SB04・(SB08)・SB09、(SA01)、SD06・SD07……7世紀中頃～8世紀前半
  - ③期 SB01・SB03・(SB08)・SB10、SD01～SD03・SD08～SD10……8世紀前半※上記に表示されていないSB02・SB05～SB07・SB11・SB12のいずれかは①期に属すると考えられる。  
※ただし、SB05～SB07は2時期に分離できるため、上記の3時期にさらに1時期加わり、計4時期の変遷をたどった可能性もある。

### 【筆者の見解】

筆者の遺構変遷の分析方法は下記のとおりである。

- (i) 遺構群の主軸方向の相違とこれに対応する遺構出土土器および包含層出土土器の年代観から2段



第 22 図 遺跡の位置と条里型地割 (1 / 15,000、註 (1) 文献より抜粋)

遺構名	建物構造	建物規模	床面積	柱間距離 (東行)	柱間距離 (南行)	柱通り	主軸方向	柱穴構造	出土土器の年代
SB01	東西建物	2間×4間 (4.4m×8.4m)	37.0㎡	2.16m	2.0～2.16m	○	N65.7° E	礎石あり	8世紀後半
SB02	組柱建物	2間×3間以上 (3.6m×4.8m以上)	17.3㎡以上	1.44～1.84m	1.44～1.84m	△	N4.0° W	礎石あり	7世紀後半～8世紀前半
SB03	東西建物	2間×4間 (4.16m×8.5m)	34.1㎡	2.0～2.16m	1.92～2.16m	○	N27.0° W	礎石あり	7世紀後半～8世紀前半
SB04	+	2間×4間 (4.6m×8.4m)	38.6㎡	2.16m	2.16m	○	N3.0° W	礎石あり	7世紀末～8世紀前半
SB05	+	2間×4間 (4.4m×8.2m)	36.1㎡	2.16m	1.92～2.16m	○	N6.3° W	礎石あり	7世紀後半以前?
SB06	組柱建物	2間×2間 (3.6m×3.6m)	13.7㎡	1.92～2.08m	1.60～2.24m	○	N7.5° W	—	—
SB07	東西建物	1間×2間 (1.6m×3.6m)	6.5㎡	1.80m	1.80m	○	N7.5° W	—	—
SB08	+	1間以上×2間以上 (1.6m以上×3.6m以上)	6.9㎡以上	1.80m	1.92m	○	N3.3° W	礎石あり	8世紀代
SB09	+	2間×3間 (4.2m×6.5m)	27.3㎡	1.92～2.24m	1.92～2.24m	○	N6.3° W	礎石あり	+
SB10	+	2間×3間 (4.8m×6.2m)	24.8㎡	1.76～2.24m	1.84～2.72m	○	N6.0° E	—	7～8世紀代
SB11	+	2間×4間 (4.2m×8.6m)	27.7㎡	2.24m	1.28～1.76m	△	N77.0° W	礎が小さく 基ひ悪い	—
SB12	+	2間×2間以上 (3.2m×3.6m以上)	11.5㎡以上	1.80m	1.80m	○	N0.1° W	—	—
SA01	—	3間	—	—	2.0m	○	N69.0° E	—	7世紀後半～末

第 21 表 掘立柱建物・柵列一覧表

階に大別する

(第22表のⅠ期とⅡ・Ⅲ期に2分。

Ⅰ期 : 7世紀後半[SD05出土土器より]。主軸方向はN-27°-W。

Ⅱ・Ⅲ期: 7世紀末～8世紀中葉[SD06出土土器が7世紀末～8世紀初頭に、SD08出土土器が7世紀末～8世紀前葉に、包含層出土土器のうち8世紀代に属するもの下限が8世紀中葉に位置付けられることより。]主軸方向はN-75°～0.1°-W)。

(ii) 第22表のⅡ・Ⅲ期の所属遺構は遺構の切り合い関係等から見て全ての遺構が同時併存しえないため、細分を試みる。着目する要素は遺構の切り合い・重複・密着(8)関係、柱筋を揃える建物群の配置状況、出土土器の年代観などである。

(iii) (ii)の諸要素の検討結果は第22表に整理したとおりであるが、Ⅱ期とⅢ期に細分できると考える。なお、Ⅱ・Ⅲ期の時期幅は出土土器の年代観より約50年間と見られる。これは掘立柱建物の耐久期間を20～30年と考えた場合、2時期でのべ40～60年となり、違和感はない。

### (3) 集落の変遷

前節での分析に基づき、遺構の変遷と各期の様相について述べる。

#### Ⅰ期(7世紀後半)

本遺跡において集落が初めて形成される時期である。Ⅰ区北側に掘立柱建物跡1棟(SB03)、溝状遺構3条(SD04・SD05・SD10)が分布する。検出された建物跡は1棟のみであるが、床面積は34.1㎡を測り、本遺跡では大型の部類に属する。

なお、以下の説明では床面積30㎡～40㎡:大型建物、20～30㎡:中型建物、～20㎡:小型建物と表記する。

#### Ⅱ期(7世紀末～8世紀前葉)

遺跡周辺の条里型地割と主軸方向を揃える建物群が出現する時期である。これらはⅠ区全域に分布し、大型建物1棟(SB04 床面積38.6㎡)、中型建物1棟(SB09)、小型建物2棟以上(SB02・SB06・SB07。ただし、SB02はⅢ期に所属する可能性もある)、規模不明建物1棟?(SB08 ただし、Ⅲ期に所属する可能性もある。)で構成される。

このうち規模が大きいSB04は中心的な建物、総柱建物であるSB02・SB06は倉庫と考えられる。また、SB04はⅠ期SB03とほぼ同規模・同構造(2間×4間の側柱建物)であり、SB03から床面積をやや拡大させて建て替えられたと考えられる。

建物間で柱筋を揃えるものとして、以下が挙げられる。

- ・SB06の南北列中央柱筋とSB07の西側桁行。
  - ・SB02の北側梁間とSB07の北側梁間。
  - ・SB02の東側桁行とSB09の東側梁間(ただし、SB02はⅢ期に属する可能性もある)。
- このように柱筋を揃える建物群が(複数)あり、建物配置には一定の企画性が見られる。

なお、遺跡周辺の条里型地割と主軸方向を揃える遺構のうち、出土土器から時期が判明する上限のものはⅡ期SD06(7世紀末～8世紀初頭)である。

#### Ⅲ期(8世紀前葉～8世紀中葉)

Ⅱ期の集落様相が基本的に継続する時期である。建物群は主軸方向を周辺の条里型地割のそれと揃え、Ⅰ区南側に分布する。建物構成は大型建物2棟(SB01 床面積37.0㎡、SB05 床面積36.1㎡)、小

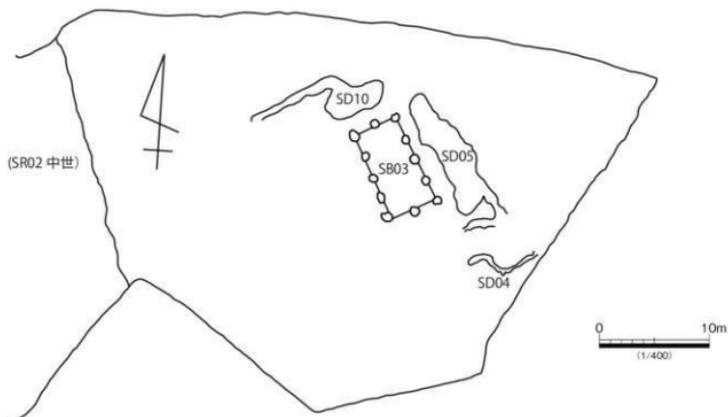
	I期 (7世紀後半)	II期 (7世紀末～8世紀前半)	III期 (8世紀前半～8世紀中葉)	判断根拠(主軸方向以外の要素)
主軸方向	N-27° -W	N-7. 5° -W	N-0. 1° -W	
SB03				(●主軸方向から判断)
SB06				●近接するSB07と柱筋を揃える。 ●SB05とは切り合い、先行する。
SB07				●近接するSB02・SB06と柱筋を揃える。 ●SB05とは切り合い、先行する。
SB04				●近接するSB01とは切り合い、先行する。 ●SD01・SD02・SD03を雨落ち溝として伴う。
SB09				●SB01と密着し、同時併存しない。 ●近接するSB02と柱筋を揃える。 ●SB04をはじめとするI期の建物と同時併存しうる。
SA01				●出土土器の年代観。 ●SD05とは切り合い、後出する。
SB02				●II期のSB07・SB09と柱筋を揃える。 ●III期のSB01・SB05と柱筋を揃える。
SB08				(●主軸方向から判断)
SB05				●近接するSB02・SB12およびSB01と柱筋を揃える。 ●SB06・SB07とは切り合い、後出する。
SB01				●近接するSB02・SB05およびSB12と柱筋を揃える。 ●SB04とは切り合い、後出する。
SB12				●近接するSB05およびSB01と柱筋を揃える。

第22表 掘立柱建物跡・欄列跡の所属時期と時期比定の根拠

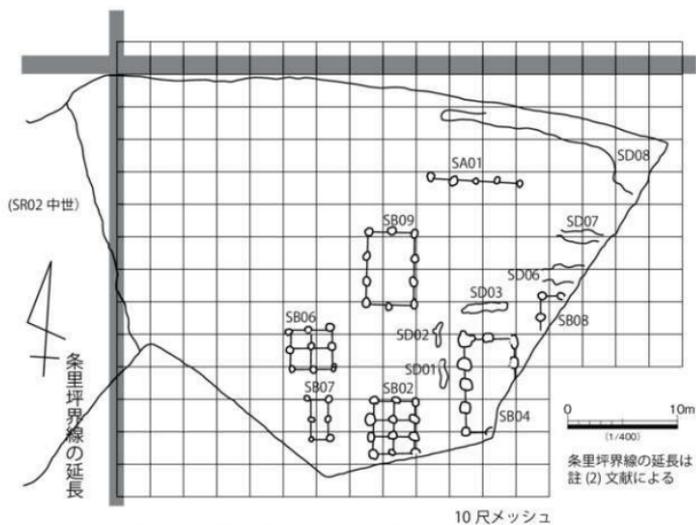
	I期 (7世紀後半)	II期 (7世紀末～8世紀前半)	III期 (8世紀前半～8世紀中葉)	判断根拠(主軸方向以外の要素)
主軸方向	N-27° -W	N-7. 5° -W	N-0. 1° -W	
SD05				●出土土器の年代観。 ●SA01とは切り合い、先行する。
SD04				●SD05と合流する。 ●SB01・SB04・SB08に切られる
SD10				(●主軸方向から判断)
SD01				●SB04に伴う雨落ち溝。
SD02				●SB04に伴う雨落ち溝。
SD03				●SB04に伴う雨落ち溝。
SD06				●出土土器の年代観。
SD07				(●主軸方向から判断)
SD08				●出土土器の年代観。
SD09				●SD08を切る。

第23表 溝状遺構の所属時期と時期比定の根拠

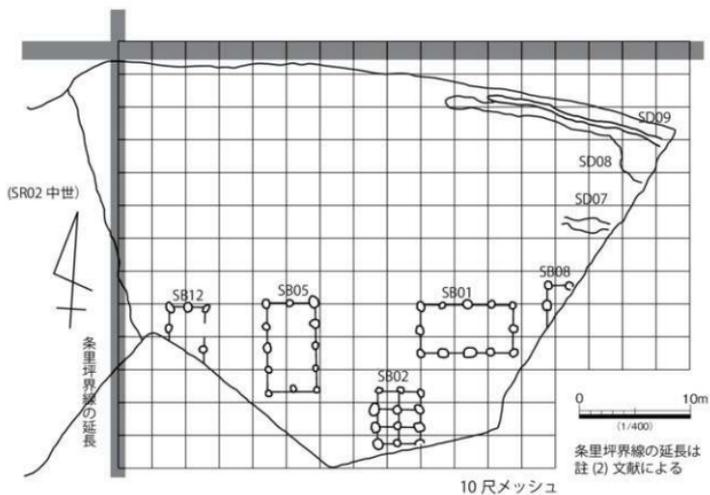
※SB10・SB11は主軸方向や柱穴規模などの検討により、I～III期に属さない別時期の遺構と判断した。



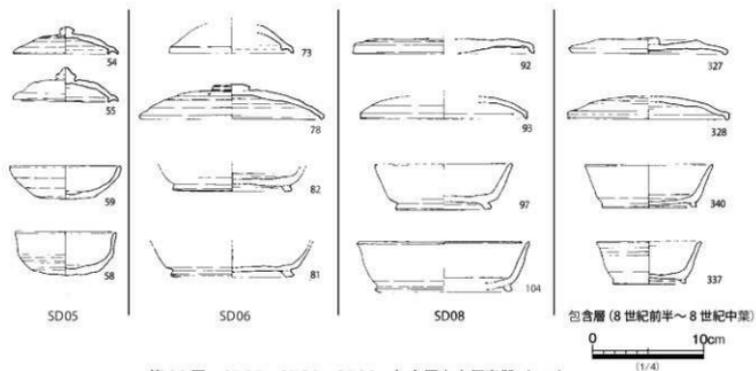
第23図 集落の変遷 (I期 7世紀後半) (1/400)



第24図 集落の変遷 (II期 7世紀末~8世紀前葉) (1/400)



第25図 集落の変遷(Ⅲ期 8世紀前半～8世紀中葉)(1/400)



第26図 SD05・SD06・SD08・包含層出土須恵器(1/4)

遺物番号は註(1)文献の報文番号に対応

型建物1棟? (SB02。ただし、Ⅱ期に所属する可能性もある。)、規模不明建物1棟以上 (SB08・SB12 ただし、SB08はⅡ期に所属する可能性もある。)である。

中心的な大型建物はSB01・SB05の2棟あり、倉庫としてSB02がⅡ期から存続すると考えられる。SB01・SB05の2棟はⅡ期SB04と同規模・同構造(2間×4間の側柱建物)であり、SB01はⅡ期SB04と重複する位置にある。このためⅡ期SB04から建て替えられたと考えられる。また、SB05もSB01とⅡ期SB04の存在を意識して建てられたものと見られる。

なお、SB09に対するSB01、SB06・SB07に対するSB05は遺構配置が密着しているため、同時併存ではない。ただ、柱筋の一部をそろえており、先行建物である前者の存在を意識して、後者に建て替えが行われたと考えられる。

建物間で柱筋を揃えるものとしては、次のものがある。

- ・SB01の北側桁行とSB05の北側梁間とSB12の北側梁間。
- ・SB01の西側梁間とSB02の東側桁行。
- ・SB02の北側梁間とSB05の南側梁間(ただし、SB02はⅡ期に属する可能性もある)。

このように柱筋を揃える建物群が複数あり、建物配置における一定の企画性がⅡ期以来、継続して見られる。

以上より掘立柱建物を中心とする遺構群で構成される集落がⅠ期(7世紀後半)に形成され、Ⅱ期(7世紀末～8世紀前葉)には遺跡周辺の条里型地割と軸方向を揃え、ある程度企画的な配置をとる建物群が形成される。この様相はⅢ期(8世紀前葉～8世紀中葉)に継続するものの、この時期のうちに集落は廃絶したと考えられる。また、Ⅰ～Ⅲ期を通して中心的な大型建物はほぼ同規模・同構造であることからこの形態を踏襲して建て替えられたと考えられる。このような建物配置の計画性と建物自体の規格性・継続性はしばしば官衙遺跡で見られるものであり、注目できる。

#### (4) おわりに

本稿では川北遺跡で検出された7世紀後半～8世紀中葉の古代集落跡について検討を行い、遺構の変遷について私見を提示した。また、次の2点を指摘した。

- 1 7世紀末～8世紀前葉に、官衙の定型的な建物配置(「コ」字型配置など)ではないものの、柱筋を揃えて一定の企画性を持つ建物群が出現し、その後8世紀中葉にかけて存続する。
- 2 この集落の中心的な大型建物は2度の建て替えを経ながら、集落の出現から廃絶にかけて長期間存続する。そして、当初の規模と構造が踏襲され続ける。

こうした建物配置の企画性、中心建物の規格性・継続性は官衙的な要素であると言え、本遺跡に関する既往の評価「官衙的な要素を帯びる遺跡」に関して、内容を補足した。

最後に、本遺跡の地域における位置付けを筆者は十分に行っていない。今後、検討を進めたい。

- (1) 古野徳久『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第51冊 川北遺跡 三殿出口遺跡』香川県教育委員会(2004)
- (2) 木下晴一「川北遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』香川県教育委員会(1999)

- (3) 長井博志「川北遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』香川県教育委員会 (1999)
- (4) (1) に同じ
- (5) (2) に同じ
- (6) (1) に同じ
- (7) 報告者はこの4棟を2群に分離する理由を“3・4群に分けることも可能であるが、その場合建物群の組み合わせのパターンが増える。また、3条の溝状遺構（①期 SD05【7世紀中葉】・②期 SD06【7世紀中葉～8世紀前半】・③期 SD08【8世紀前半】）との重ね合わせもそれぞれのパターンで複数成立することとなる。そうなると、他の遺構の時期判断はほとんど不可能となる。2群に分けた場合が、他の遺構の時期も最もうまく説明できるため、正しい時期を示している可能性が高いと判断する”との趣旨を述べている。
- (8) 「SB○がSB○○と密着」の「密着」とは、複数の建物跡が重複・切り合い関係にはないものの、ごく近接しており、軒の出から見て同時併存が難しい状況を示すため、本稿で使用した仮設的な用語である。

## 2 (提言) 記録保存としての報告書

真鍋昌宏

### (1) はじめに

「埋蔵文化財の保護」の一形態として、記録保存という方法がある。これは、遺跡の内容を現地保存ではなく記録として保存するものである。

しかし、記録保存の一形態として作成した報告書について、限られた調査期間・整理期間の中、客観的な記録としては十分でないものが散見される。

考古学はいわゆる「科学」(注1)の範疇からは少し離れており、遺跡の調査においては、調査そのものが破壊活動であると言われるように、実証的方法により追体験をすることができない性格のものである。しかし、記録保存の目的は、これができるだけ再現できる記録を作成し、保存し、提供することである。このことから、記録保存として作成されている報告書に求められるものは、論考・考察ではなく、正確なデータである。もちろん、論考や考察が不必要と言うわけではない。複数の時期が重複する遺跡においては時期ごとの遺跡・遺構の変遷や、その遺跡の特徴的な性格など、データの提示だけでは理解できない部分を提示する意味は大きい。ただ、提示されているデータが不十分であれば、論考・考察で記述されている内容は検証できず、単なる私見と言う事で終わる。そうならないためにも、読者(≒研究者)が納得できるだけのデータを掲載すべきである。

ここで述べようとすることは、ごくあたりまえのことであるが、いつの間にかあたりまえでなくなりつつあることへの問題提起である。

以下、遺跡を理解する上で必要な最小の単位である遺構の年代を決定するプロセスと基準となる土器編年について、若干の提案をしたい。

### (2) 遺構の年代決定

出土した土器の年代をAとした場合、検出した遺構の年代の考え方を簡単に整理したものが第24表である。

例えば、竪穴建物为例にとると、居住している状態での家屋の焼失や原因は不明であるが放棄された場合は、使用していた土器がそのまま残されていると考え、遺構の年代はAと考える。次に移動などに伴い住居を廃棄していく場合、人為的に埋め戻されたものであれ、自然に埋没したものであれ、床面におかれていた土器は同様にAと考えられるが、埋土中に土器片が含まれる場合は不明、まとまって廃棄されているものはA以前と理解する。この不明については、遺構の年代がA以前、A、A以降のいずれになるかは出土状況による推測が可能であるが、ミスリードにつながる可能性も考慮して推測する意味があるかどうかを考える必要がある。

次に掘立柱建物であるが、掘立柱建物は他の遺構と異なり、単独の遺構である柱穴(Pit)の組合せで成立しており、組合せが間違っていれば、その後の論が崩壊する。このため、掘立柱建物と断定するにはいくつかの根拠を提示する必要がある。

柱穴の組合せが間違いないとは確信できるのは、

- ① そこに存在するほぼ全ての柱穴が利用され、掘立柱建物が構成されている場合。

② 想定される掘立柱建物の柱穴のみ、他の柱穴とは異なる埋土で構成されている場合。

③ 雨落溝等に囲まれた区画内で完結している場合。

など、限られたケースである。

このため、多くの柱穴密集部分での掘立柱建物の復元は、その組合せが妥当である事を証明する必要がある。往々にして、長方形を構成することで根拠としているものが多いが、これは一つの可能性を示しているに過ぎない。

次に年代であるが、土器等の遺物が柱穴内から出土した場合、それが掘立柱建物の建築時か廃棄時かは問わず、埋納されたものであるのか、柱を固定する際の埋土中に含まれる遺物なのかを見極める必要がある。前者の場合、建築時であろうが、廃棄時であろうが、遺物の年代が掘立柱建物の存続期間の一部に重なると言える。しかし、後者の場合、遺物の年代より建物の年代が後であるということしか言えない。

掘立柱建物の復元そのものに疑義がある場合は、単独遺構としての柱穴の年代を上記の考え方にあてはめて考えるのみである。

以上のような考え方に基けば、ほとんどの遺跡で掘立柱建物の復元が難しくなると考えられるが、記録保存の観点から考えれば、報告書の段階で推測を交えた結論付けを行ってまで完結させる必要はない。

A= 土器年代

遺構名	状 況				遺構年代	備考
竪穴建物	居住時	焼失			A	
		放棄			A	
	廃棄時	人為/自然	床面		A	
			埋土中	含まれる	×	
		一括廃棄		A 以前		
掘立柱建物	組合せ	妥当	埋納	建築時	A	
				廃棄時	A	
			混入		A 以降	
		疑問			×	
		不可			×	

第 24 表 遺構の年代

次に、実際の報告書の記載を例に考えてみる。

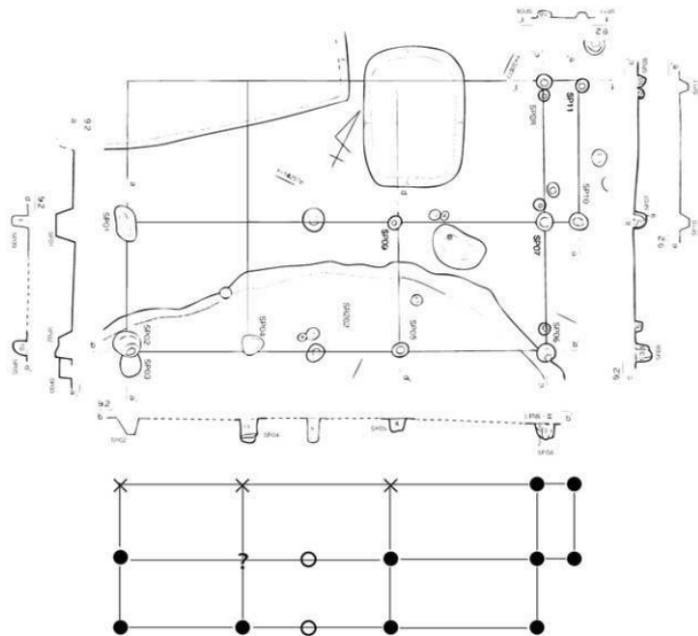
例1 川津六反地遺跡

SB219

「東辺に小さな廂をもつ南北棟の梁間2間、桁行3間の総柱建物である。SR202の上面で検出しており、SR202が埋没した後に形成された建物である。なお、北側柱列の西半部は攪乱により欠く。

2間(4.4m)×3間(6.8m)、面積29.9㎡、主軸方位N63.0°E(N27.0°W)を測る。柱間は梁間2.1～2.3m、桁行1.9m～2.5mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整形形を呈し、径約0.25～0.45m、深さ0.1m～0.4mを測る。

柱穴からは土師器小皿・杯、青磁碗片等が出土した。442(6/8)・444(8/8)・448(破片)はSP01から出土した土師器小皿と青磁碗口縁部片である。443(1/8)はSP08、447(4/8)はSP06から出土した土師器小皿・杯である。445(1/8)・446(3/8)はSP05から出土した土師器小皿である。出土遺物からSB219は、13世紀後半頃の建物跡と考えられる。」(( )内は残存率を示す。報文に加筆)



第27図 SB219平面図

#### 検討①

×は「攪乱により欠く」は致し方ないが、?については説明がない。また、総柱建物とした場合、○をどう理解するのか、触れられていない。

このため、2間×3間の総柱建物と考えられるのか疑問が残る。

#### 検討②

SB219を含め、ここでは図示していないが、近接するSB217・218ともに、埋土が記録されているものは、黄灰色粘質土もしくは灰白色粘質土であり、埋土からは単体の掘立柱建物とは認定できない。

#### 検討③

仮に、この掘立柱建物が正しく復元されていると仮定した場合、主柱穴ではないSP06・08から出土した遺物で、SB219の年代を決める根拠にしているのか？

また、遺物の出土状況については説明がない。

#### 検討④

遺物の検討や根拠が示されず、13世紀後半頃とされている。

#### 検討⑤

遺構写真は完掘後のもので、埋土の状況などが観察できないため、写真を検証材料としては利用できない。

### 例2 稲木北遺跡

調査の概要で、「本遺跡においては古代の官衙跡を構成すると見られる大型建物群・柵列群を中心に弥生時代の土坑、溝状遺構などを検出した。」「柵列跡の内部では床東建物（Ⅲ区SB3001）を中心とする中核建物群、外部では総柱建物からなる倉庫群があり、位置によって機能の異なる建物が構成されている。また柵列跡による区画範囲は東西約60mを測り、郡衙政庁での区画規模と同等以上である。」「ただ、官衙に伴う特殊な遺物（硯、墨書土器、木製祭祀具、木簡、帯金具など）の出土はない。」「出土土器から見たこの存続期間は遺構の状況（大型建物群・柵列群のきわめて計画的な配置、遺構の切り合いや建物跡を構成する柱穴跡の建て替え痕跡の乏しさ、遺構埋土の高い共通性など）から推定される遺構の短期性と総合的である。」と記述されている。

個別の遺構のうち、SB3001は出土遺物に恵まれず、「建物跡の時期は企画的な配置をとる大型建物群の1つであるため本節の冒頭で述べた（注2）とおり、8世紀初頭～前葉に位置付けられる。」とした。

この遺跡で検出された大形掘立柱建物跡（注3）や柵列跡については、先に述べた「①そこに存在するほぼ全ての柱穴が利用され、掘立柱建物跡が構成されている場合」という条件を充たしており、掘立柱建物跡として問題はない。

次に遺物については、掘方埋土中の出土で、埋納とは考えられていない事から遺物の年代（8世紀初頭から前葉と記述されている）以降の遺構としか言えない。

このことから、稲木北遺跡のまとめとして、①大形掘立柱建物跡や柵列跡が確認された。②大形掘立柱建物跡を構成する柱穴埋土中から須恵器片が若干出土している。③建築年代は埋土中から出土した須恵器の時期以降で、廃絶年代は不明である。ということになる。

なお、本遺跡の性格として、大形掘立柱建物跡の規模、配置、立地の観点から郡衙を想定しているが、古代の集落遺跡の建物配置や建物の規模などの比較が十分でないこと、官衙に伴う特殊な遺物（硯、墨書土器、木製祭祀具、木簡、帯金具など）の出土がないことから、他県の例から見て官衙特有の建物配

置である可能性は高いが、あくまでも推測の域を出ない。

また、出土須恵器は8世紀初頭としながら、時期不明の旧河道SR4001から出土した8世紀前葉の須恵器を加えて建物群の年代を前葉までとする考え方には賛成できない。なお、8世紀初頭～前葉の年代観の基準は不明である。

以上のように、遺構の性格や遺構の年代決定にはより慎重な検討が必要である。

### (3) 土器編年について

遺物、遺構、遺跡の年代観を示すために必要な情報として、いつの時代の遺物か、どの遺構に伴うか、その遺構はその遺物の年代と同時に否か、結局どの時代の遺跡なのかという結論になる。

遺物の年代は、報告書を見てみると、弥生時代後期後半等のように、あまりにも漠然と記述されている事が多く、執筆者のいう後期後半はいったい何を指しているのか不明であることが多い。

編年の目的は、A遺跡とB遺跡が同一様式の土器を用いた時代に存在したことを前提に、集落のあり方や地域性などを比較検討し、遺跡の特性を明らかにしていく物差し作りであると理解している。また、土器編年はあくまでも相対年代を示すものである。

この考え方にに基づき、一般的に良好な状態で出土した土器群の内容を検討し、A遺跡のA土坑の資料とB遺跡のB土坑の資料を同一様式と考え、互いに欠けた器種等を補いながら一様式と定め、他の要因である遺構の先後関係や層位の上下などの要素を加えて序列を決め、編年案として提示しているを理解している。

このように、「土器編年の基準資料＝遺構一括出土資料」と捉える事ができるため、物差し作りのためには、まず、一括資料を求める必要がある。

一括資料は、単一の遺構から出土し、その出土状態から同時に廃棄もしくは埋納されたことが考えられる「まとまり」と言える。

かつて、弥生土器の様式概念を提示し、現在も弥生土器研究の基本となっている小林行雄の考え方に、「(前略) 堅穴ごとに単純遺跡に近い状態で検出した様式を論拠として、層位的証明によらずに(後略)」(小林1971)とあるように、一括資料＝1様式の構築を意図したのと言えらる。編年の手法については、濱田延充がまとめている「弥生土器様式概念の形成と日本考古学」(濱田2010)に譲るが、この一括資料の認定が客観的に可能か(混入はないのか)という疑問も生じる。

これを客観的に証明するため、型式序列が提示されることが多い。「・・・とすれば遺構単位の土器の新旧関係の羅列(一括出土品の時間差)のみに終始しがちな最近の風潮に抗して、あくまで様式を重視して編年を編むように心がけた。」(寺沢1989)

香川県の様式編年の場合、弥生土器を例にすると、信里芳紀が示した、甕AをA1からA8に区分し、これを基準として各様式として提示する方法がこれにあたる。(信里2005)この中では、「[中期Ⅲ-2様式] 甕A6型式を指標とする。基準資料として、矢ノ塚遺跡SX85005がある。矢ノ塚遺跡SD85031は、A7型式を含むことから、後述する中期Ⅲ-3様式との混在資料である。(後略)」として、型式を優先させ混在、混入等の選別を行っている。

このほか、中期Ⅱ-1様式古段階として「西又遺跡SD06出土資料から中期Ⅰ様式の土器群と甕A2型式を差し引いたものが該当する」、「川津一ノ又SH32出土資料は、混在する終末期の土器群を取り除けば、本小様式の資料とすることができる」としている。同様に中期Ⅱ-1様式新段階でも「基準資料は、川津一ノ又遺跡SD62・彼ノ宗遺跡SK1出土資料がある。川津一ノ又遺跡SD59/100出土

資料は、堯 A4 型式など後続する中期Ⅱ-2 様式の土器群を差し引けば、大半が本小様式のものとする  
ことができる」とした。

この、様式設定は説得力があり、否定する根拠を持ち得ないが、この考え方でいいのかという若干の  
躊躇がある。

	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8
西又 SD08	○	○						
彼ノ宗 SK1		○						
川津一ノ又 SD62		○	○					
川津一ノ又 SD59 / 100			○	△				
矢ノ塚 SK85104				○				
矢ノ塚 SX85004				○				
旧練兵場 SK11				○				
陶畑土器溜まり				○				
彼ノ宗 ST19					○			
旧練兵場土器溜まり					○	△		
矢ノ塚 SX85005						○		
矢ノ塚 SD85031						○	○	
矢ノ塚 SD85121						○	○	
久米池南 2 号テラス							○	
上天神 4 区 SD08								○
大空土坑								○
様式	中期 Ⅱ-1 古	中期 Ⅱ-1 新		中期 Ⅱ-2	中期 Ⅲ-1	中期 Ⅲ-2	中期 Ⅲ-3	後期 Ⅰ-1

第 25 表 堯の各型式の基準資料内での共存状況 (2005 信里文献より)

この型式優先の問題点として、全ての器種が網羅された一括資料が無いこと、地域性をどの範囲で考  
えるか、器種の地域性を抽出できるかなどがある。このため一括資料の組合せによる標準様式を作成す  
る段階で、個々の一括資料と言われている資料群で型式選別を行った場合、標準様式の提示が果たして  
可能かということがある。

このように、既存の形式型式様式の優れた点は、遺物の混入などのチェックが可能となる点が最大の  
ポイントであるが、これにより同時期に存在する器種の除外ということも発生しうる両刃の剣の状態も  
想定される。

このことは、小林行雄により「(前略) 様式標識はすべての土器形式に平等に現れるというわけでは



なく、形式によって様式標徴のあらわれ方に濃淡がある。(後略) (小林 1939) と指摘されており、どの形式、型式にこれが現れるのかの検討が必要となる。これは、今後の課題としておくが、ここでは、様式の整理や設定が目的ではなく、具体的な地域史を考えることを優先させ、あくまでも一括性の高い遺物を基準とした遺跡の位置づけを行う必要があるということを通認識として持つ必要がある。

第 26 表は、現在までに提示された編年案を単純に並べたものである。同じ土器群の位置づけが、報告者により異なることも多いが、それぞれの様式設定において、標準としている一括資料が提示されている。

このため、様式の考え方や内容についての検討とともに、比較検討が可能な考え方として、標準一括資料での記述も同時に試みる必要がある。(例えば「彼ノ宗 SK1 出土資料と同時期」などの記述)

いずれにしても、執筆者の考え方を明確にしていく必要がある。

#### (4) まとめ

香川県では、唐古遺跡で提示された畿内 5 様式編年を受けて、六車恵一が「讃岐弥生式土器聚成図録」で前期一式、中期二式、後期三式に区分した(六車 1956) ほか松本豊風 も前期三様式・中期三様式に区分案を発表している。(松本 1957)

これ以降、さまざまな編年案等が提示されてきたが、中でも、大久保徹也(1990, 2003) や信里芳紀(2005, 2011) の整理には目を見張るものがある。しかしながら、先にも述べたように、発掘調査や整理作業を通して様式の設定がなされる事から、相互の様式案の比較検討も必要となるなど、編年の本来目的へのアプローチが困難になりつつある側面も否めない。

このため、根拠のない弥生時代中期後半などの漠然とした記述と集落論が提示される例も多々ある。先にも述べたように、調査段階での遺構の検出と遺物の出土状態の客観的資料の提示。これに基づく一括資料の提示。年代観の準用の際の根拠の提示。あわせて比較検討のための標識遺構の提示を行う必要がある。

今回の提言は、大規模開発に伴う多量の記録保存に対して、記録保存に耐えうるデータの取得ができていなかった例もあり、今後の地域史を考えていく上で、最低限の記録化を図るとともに、相互検討のための共通理解としての根拠資料の提示を行おうとするものである。

当初、弥生土器編年についての再整理を目的としていたが、以上述べてきた基本的な報告書のあり方についての記述になったのは、出土状況からの検討を行おうとした時に、出土状況についての記述が少ない報告書が多々ある事に端を発している。これは、報告書批判を意図したのではなく、今後の調査における留意点を述べようとしているため、本文中での記述に不適切な表現や筆者が誤解している点があるかもしれないが、批判も含めて、今後の調査・整理の段階で担当者としての考え方をまとめていきたい。なお、弥生土器編年の再整理については、後日を期したい。

#### 注

(1) 「広辞苑 第六版」岩波書店 によれば、「科学」観察や実験など経験の手続きによって実証された法則的・体系的知識、「社会科学」社会現象を対象として実証的方法によって研究する科学の総称、「科学的方法」科学的な認識に到達するために必要な実証的・論理的な研究法と記述されている。

(2) 「規格的な配置をとる古代の大型建物群・柵列群の時期については SA2001・SB4002・SP2049 よ

り出土した土器から判断すれば8世紀初頭ごろと見られる。だがこれにSR4001出土遺物を加えて考えると8世紀初頭～前葉に位置づけられる。」(一般国道11号線坂出丸亀バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 稲木北遺跡 永井北遺跡 小塚遺跡 香川県教育委員会 国土交通省四国地方整備局 2008)

(3) 規模的に大きな建物と言う事であれば「大形」、掘立柱建物跡を一定の基準で分類した場合は「大型」などの使い分けが必要と考えている。ここでは、分類が行われていないことから「大形」に統一した。川津六反地遺跡

国道438号道路改良工事・県道富熊宇多津線道路改良工事・城山川河川改修事業に伴う埋蔵文化財文化財発掘調査報告 川津六反地遺跡 川津昭和遺跡 香川県教育委員会 2014

稲木北遺跡

一般国道11号線坂出丸亀バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 稲木北遺跡 永井北遺跡 小塚遺跡 香川県教育委員会 国土交通省四国地方整備局 2008

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公団

大久保徹也 2003「四国北東部地域における首長埋葬祭祀様式の画期－土器編年との対応関係について－」『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』財団法人大阪府文化財センター

小林行雄 1939「弥生式土器聚成図録正編解説」『東京考古学会会報』1 東京考古学会

小林行雄 1971『図集日本文化の起源』一 平凡社

寺沢薫 1989「序文」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ(第19次調査)』香川県教育委員会 独立行政法人国立病院機構普通寺病院

濱田延充 2010「弥生土器様式概念の形成と日本考古学」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

六車恵一 1956「讃岐弥生式土器聚成図録」『文化財協会報特別号 第1集』香川県文化財保護協会

真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社

松本豊胤 1957「讃岐室本町の弥生式土器」『上代文化27』など

森下英治 2001「普通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討(上)」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

香川県埋蔵文化財センター年報

平成25年度

平成26年9月30日 発行  
編集・発行 香川県埋蔵文化財センター  
〒762-0024  
香川県坂出市府中町南谷5001番地の4  
電話 (0877) 48-2191  
FAX (0877) 48-3249  
印刷 ワールド印刷株式会社